

仙台市文化財調査報告書第291集

大野田古墳群

——第9次発掘調査報告書——

2005年2月

仙台市教育委員会

序 文

日頃より仙台市の文化財保護行政に対しご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。仙台市は宮城県のみならず、東北地方の中核都市として文化的・経済的に飛躍的な発展を遂げております。この事は開発事業に特に顕著で、長町副都心開発による都市基盤整備事業をはじめ、市内各所において土地区画整理事業や道路の整備、公共・民間による大規模施設などの建設が立て続けに行なわれております。

市内には旧石器時代から近世にかけての数多くの埋蔵文化財を有しております。これらの中には一昨年に国史跡に指定され、調査・整備の進む仙台城跡や、遺跡を保存し公園整備が進んでいる山田上ノ台遺跡、陸奥国分寺跡、陸奥国分尼寺跡、さらにかつての陸奥国府と考えられる郡山遺跡など、学術的評価が高い遺跡も多く、私たちはこれらの文化遺産を後世に伝える責務を負っているものといえます。また今後とも増えると予想される埋蔵文化財調査に対応した体制整備も求められるなど、課題も山積しております。

本報告書は、近年開発が目覚しい富沢駅周辺開発事業に関連したものであり、付近一帯に所在します大野田古墳群の調査成果を収録したものです。この遺跡は有数の古墳分布地であると共に、中世の幹線道路や古代の畑跡、さらに近年は新たに古代の役所跡の存在が推定されるなど、今後大変興味を持たれる遺跡といえます。この様なことから本書がより多くの方々に活用され、学術研究の場においても役立てれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、地元の皆様、関係諸機関、調査に参加なされた多くの方々からご指導、ご協力を賜りましたことに対し、心より感謝申し上げます、発刊のご挨拶と致します。

平成17年2月

仙台市教育委員会

教育長 阿 部 芳 吉

例 言

1. 本書は、(仮称) 斎藤マンション建設に伴い、平成16年9月27日から同年11月11日にかけて実施した仙台市太白区大野田字宮脇他に所在する大野田古墳群第9次調査の成果を収録したものである。
2. 本調査は、仙台市教育委員会の指導・監督のもとテイケイトレード株式会社が行った。
3. 出土遺物・資料の基礎整理および本書の作成作業は、仙台市教育委員会文化財課 佐藤 淳、テイケイトレード株式会社 黒田恵之・東野豊秋が行った。
4. 本文の執筆は、佐藤 淳の指導のもとに以下のとおり行った。
第1章、第3章、第5章、第6章 黒田恵之 第2章、第4章 東野豊秋 第6章 佐藤 淳
5. 本調査および報告書作成に関する諸記録、出土遺物などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 第1図は、国土地理院発行の1/25,000の地形図「仙台西南部」を複製して使用した。
2. 第2図は、仙台市都市計画基本図「X-QE60-2」・「X-QE61-1」を基本に複製、合成して作成した。
3. 土層注記に記載している土色は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄)に基づいて認定した。
4. 調査で使用した座標系は、日本測地系直角平面座標系第X系における座標値である。
5. 本書中で表記している座標及び標高の基準は、仙台市都市整備局富沢駅周辺開発事務所設置の基準杭を基準とする。
6. 全体図・遺構図
 - (1) 全体図・遺構図の方位は、真北を示す。
 - (2) 遺構名については以下の略号を使用した。
SD：溝跡 SX：性格不明遺構 P：ピット・小穴
 - (3) 小溝状遺構については、群を形成する単位を算用数字で表記し、同時性の可能性がある群についてはアルファベットの大文字を付記している。各群の溝番号は(群1)のように枝番号を記した。
 - (4) 層位名は、基本層位をローマ数字、遺構内堆積土層位を算用数字で表記し、細分層についてはアルファベットの小文字を付記している。
 - (5) 全体図の遺構配置図は1/100、各種断面図は1/60としている。
7. 遺物図
 - (1) 遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下の略号を付記している。
C：土師器(非ロクロ) Ka：打製石器 Kd：石製品
 - (2) 遺物の法量で()で示した数値は、土器類については復元推定値、その他の遺物については残存値を表記している。
 - (3) 遺物図は実寸で作成したものを、土器類は1/3、石器および石製品を1/2、2/3の縮尺で記載した。

目 次

序 文

例言・凡例

目 次

第1章 はじめに	1	(1) III層上面検出遺構	7
第1節 調査に至る経緯	1	(2) IV層上面検出遺構	9
第2節 調査要項	1	(3) V層上面検出遺構	11
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	1	(4) 下層調査	17
第3章 調査の方法と経過	5	第2節 出土遺物	18
第4章 基本層位	6	第6章 まとめ	19
第5章 検出遺構と出土遺物	7	検出された遺構について	19
第1節 検出遺構	7	写真図版	23

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

大野田古墳群の調査は昭和52年実施された開発行為に伴う事前調査により始まり、平成6年から現在まで継続して実施されている富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査（第5次調査）などを含め、今回の調査で第9次調査となる。これまでに墳丘が残る王ノ壇古墳・春日社古墳を含む30基以上の古墳が確認・調査されているほか、古代の畑跡とされる小溝状遺構群が遺跡範囲の全域で確認されているなど、重層的に確認される遺跡の内容について説明が急がれている。

第9次調査は平成16年9月22日に共同住宅（マンション）の建築に伴い、有限会社田中コーポ代表取締役斎藤紀美（以下、事業者）から仙台市教育委員会に発掘届が提出されたことに始まる。開発地は、太白区大野田字宮40-1地内で、ここは大野田古墳群の埋蔵文化財包蔵地内にあたり、現況は宅地造成整備が行われ更地となっていた。教育委員会と原因者である事業者との協議を経て、同年9月27日より開発によって破壊される建物部分のうち約200㎡を対象に、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査要項

1. 遺跡名 大野田古墳群（宮城県遺跡地名登録番号01361・仙台市文化財登録番号C-054）
2. 調査地 仙台市太白区大野田字宮40-1
3. 調査理由 マンション建設に伴う事前調査
4. 調査主体 仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
5. 調査担当 調査係主任：佐藤 淳
調査員：黒田恵之（テイケイトレード株式会社）
調査補助員：東野豊秋（テイケイトレード株式会社）
6. 調査期間 発掘調査 平成16年9月27日～平成16年11月11日
7. 調査面積 調査対象面積386㎡
調査面積200㎡

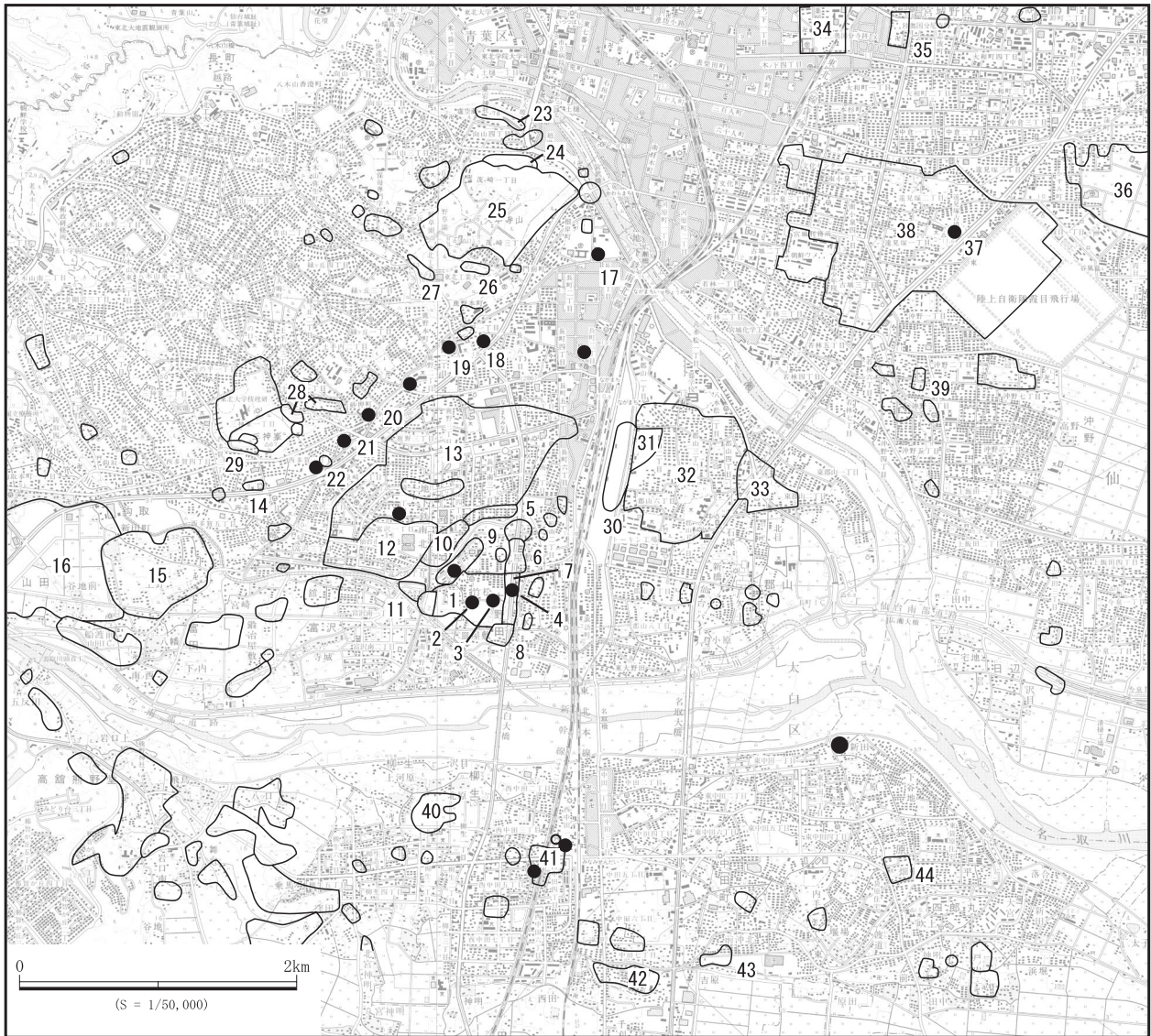
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

[地理的環境]

大野田古墳群は仙台市の東南部、仙台市太白区大野田字宮脇他に所在し、地下鉄南北線富沢駅の東側一帯に広がる。調査地は富沢駅の東に約350mの地点に位置する。調査地の現況は、水田・畑・宅地である。近年、遺跡の東側に都市計画道路が通り、遺跡のほぼ全域で土地区画整理が実施されている。そのため、調査地付近は、山砂等による盛土で造成されている。

大野田古墳群を含む地域は「郡山低地」と呼称される。郡山低地は、南縁を名取川、北縁を名取川の支流である広瀬川に囲まれた沖積地で、西縁は長町一利府構造線で丘陵地帯と画されている。また郡山低地の中には、西北約6.5kmの太白山に源を発する笹川などの小河川が袋状に蛇行しており、これらの河川の影響を受け、沖積地のなかでも旧河道・自然堤防・後背湿地が複雑に入り組んだ地形である。

大野田地区は、名取川下流の北岸部に形成された自然堤防状の微高地を含む後背湿地に立地する。南を名取川、北・東を笹川によって囲まれているため両河川の影響を強く受けた地形となっている。大野田古墳群はこの地域のほぼ中央に位置し、主に自然堤防、後背湿地に立地する。遺跡の構成土壌は、シルト・砂を主体とした河川堆積土である。標高は10～12mで、西から東に向かって緩やかに傾斜している。



No.	遺跡名	種別	立地	年代
1	大野田古墳群	集落・古墳群	自然堤防後背地	縄文・弥生・古墳・古代・中世
2	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳
3	鳥居塚古墳	前方後円墳	沖積平野	古墳
4	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳
5	元袋遺跡	集落・屋敷 他	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世・近世
6	大野田遺跡	祭祀遺跡・集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
7	王ノ壇遺跡	集落・屋敷 他	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
8	皿屋敷遺跡	集落・屋敷	自然堤防	縄文・古代・中世
9	六反田遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
10	下ノ内浦遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
11	下ノ内遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
12	山口遺跡	集落・水田跡	自然堤防沖積平野	縄文・弥生・古墳・古代・中世
13	富沢遺跡	集落・水田跡	自然堤防後背地	旧石器・縄文・弥生～近世
14	原遺跡	集落・古墳群	丘陵	弥生・古墳・古代
15	上野遺跡	集落・古墳	段丘	縄文・古代
16	山田条里遺跡	条里・屋敷・散布地	段丘沖積平野	縄文・古代・近世
17	兜塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
18	一塚古墳	円墳	丘陵麓	古墳
19	二塚古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳
20	砂押古墳	円墳	丘陵麓	古墳
21	金洗沢古墳	円墳	丘陵麓	古墳
22	裏町古墳	前方後円墳	段丘	古墳

No.	遺跡名	種別	立地	年代
23	愛宕山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
24	大年寺山横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
25	茂ヶ崎城跡	城館	丘陵	中世
26	茂ヶ崎横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
27	二ツ沢横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
28	土手内横穴墓群	横穴墓群	丘陵斜面	古墳
29	三神峯古墳群	古墳群	丘陵	古墳
30	長町駅東遺跡	集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
31	西台畑遺跡	集落	自然堤防	弥生・古墳・古代
32	郡山遺跡	官衙・寺院・散布地	自然堤防後背地	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
33	北目城跡	城館・集落	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代
34	陸奥国分寺跡	寺院	段丘	古代
35	陸奥国分尼寺跡	寺院	段丘	古代
36	仙台東郷条里跡	条里	沖積平野	古代
37	遠見塚古墳	前方後円墳・散布地	自然堤防	古墳
38	南小泉遺跡	屋敷	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
39	神柵遺跡	散布地・官衙跡	自然堤防	古代
40	柳生台畑遺跡	集落・屋敷・散布地	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世・近世
41	安久東遺跡	集落・古墳群	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
42	中田南遺跡	集落・城館	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
43	後河原遺跡	水田・集落	自然堤防後背地	弥生・古代・中世・近世
44	中田畑中遺跡	集落	自然堤防	古墳・古代

第1図 大野田古墳群周辺の遺跡

[歴史的環境]

大野田古墳群を含む名取川下流域は遺跡が数多く分布する地域である。旧石器時代から近世まで各時代の遺跡が発見されている。

大野田地区の北側の自然堤防上では、縄文時代中・後期の集落跡などが発見されている。北東側の大野田遺跡で縄文後期前半の墓域が発見され、環状集石群・配石遺構・埋設土器遺構などが検出されている。また王ノ壇遺跡では、環状配石遺構・竪穴遺構・土坑・埋設土器遺構などが検出されている。北西側では竪穴住居跡・配石遺構などが検出されている六反田遺跡や下ノ内遺跡、配石墓・集石墓・埋設土器遺構・土坑墓などが検出されている下ノ内浦遺跡がある。

弥生時代以降は、北側に位置する富沢遺跡で弥生時代中期より水田跡が重層的に検出されており、いわゆる生産域を示す地域となっていた。このことから自然堤防上に集落が分布していたことが推測される。

古墳時代に入ると名取川流域には古墳が造営されてくる。前期の代表的な古墳として、大野田地区の北東約4.2kmに位置する前方後円墳の遠見塚古墳、名取川の対岸南約7.2kmの丘陵上に位置する東北最大の前方後円墳である雷神山古墳があげられる。

大野田古墳群を含む郡山低地には古墳時代中期後半になると古墳が出現する。北部に分布する古墳は丘陵地縁辺に分布する。これらの古墳には裏町古墳や兜塚古墳などの前方後円墳が多く、一塚古墳・二塚古墳では石棺が発見されている。この時期の中心的地域を示すと推測される。一方、大野田古墳群は古墳分布域の中でも南部に位置する。名取川の北岸部に形成された自然堤防から後背湿地にかけて分布し、東西約600m、南北約300mの範囲に古墳群が形成されていることが判明している。また、大野田古墳群の他には散在するものが殆どで、群集するものは少ない。中期後半から後期の古墳の特徴は、埴輪を伴うものが多いことがあげられる

大野田古墳群では、現在のところ30基を越える古墳が確認・調査されている。中央部に前方後円墳である鳥居塚古墳、同規模で前方後円墳の可能性が高い春日社古墳が位置し、東側に墳丘の残存する王ノ壇古墳の他、小規模な円墳が密集する反面、西及び南側の検出例は少ない。古墳の墳丘は大部分が削平され周溝のみが遺存している。現在は住宅地や水田の下に埋没している状態である。

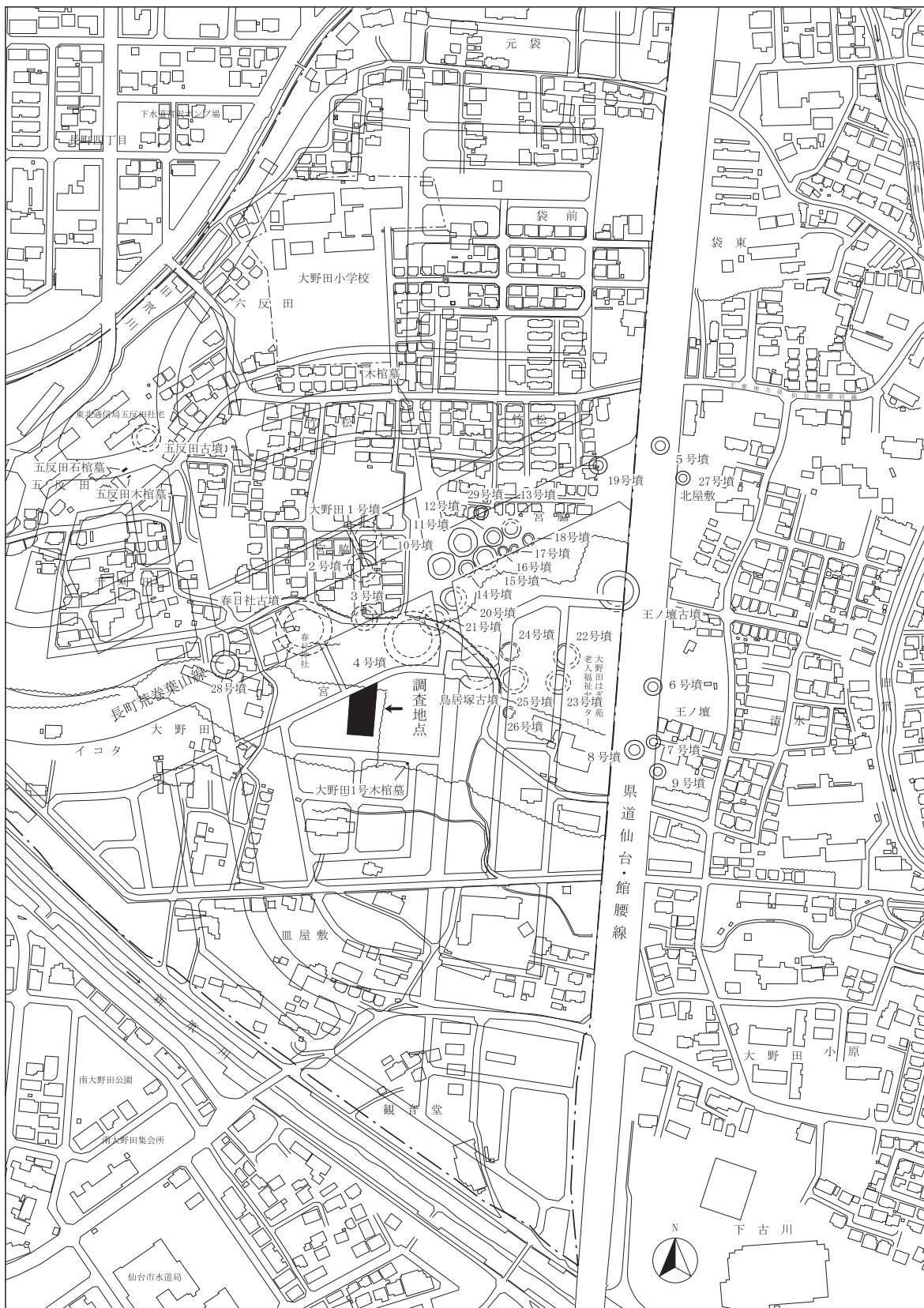
古墳時代終末期には郡山低地に官衙跡とされる郡山遺跡があらわれ、律令体制の拠点となる重要な地域であったことが窺える。この時期になると当地域では墓制の変化がみられ、長町一利府構造線に沿った丘陵部斜面に横穴墓の造営が盛んになる。愛宕山・大年寺山・宗禅寺・茂ヶ崎・二ツ沢・土手内横穴墓群などがあげられる。

古代律令体制の下、郡山低地での集落の分布は増大し、大野田地区の周辺にもこの時期の住居跡や掘立柱建物跡が多数検出されている。一方、大野田地区の沖積地は生産域として利用されている。平安時代の水田跡の他、地区のほぼ全域で畑跡の可能性が考えられる小溝状遺構群が検出されている。これまでに大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡の他に、周辺の遺跡で古墳時代から平安時代にかけてのものが多数検出されている。また、富沢遺跡では、条里型土地割りが確認されている。

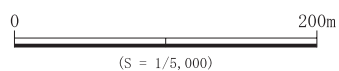
中世に入ると王ノ壇遺跡に、12世紀後半から14世紀前半まで機能していたとされる大規模な屋敷跡や道路跡が検出されており、大野田古墳群の中にも同時期の道路跡が検出されている。この道路跡は、路面を整備した幹線道路で「奥大道」の可能性が有る。

至・長町

至・富沢駅



至・太白大橋



第2図 調査区の位置と周辺の古墳

第3章 調査の方法と経過

[調査区の設定]

調査は宅地造成地約680㎡のうち建設が予定される建物により破壊される部分の約200㎡を対象とした。調査区は、南北12m、東西17mをした長方形である。調査により生じる排土は調査区南及び北側の敷地内盛土上に行うことにした。

[調査の経過]

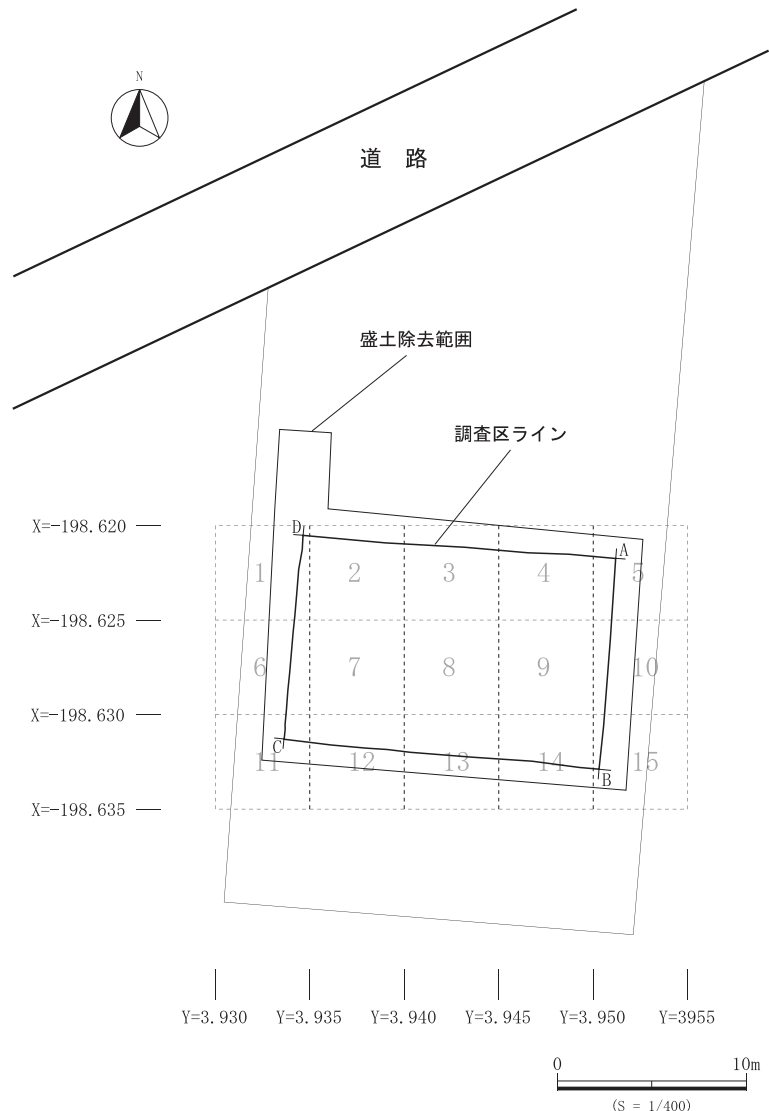
調査地は現状が宅地造成に伴い山砂で盛土されていたが、近年まで水田として利用されていた。調査はまず重機を使用して盛土の除去を行った。その後現代の耕作土であるI層を重機により除去し、II層は遺存状態が不良であるが中近世の耕作土の可能性があるので人力により掘削し、周辺の成果に基づき最初の調査面としてIII層上面での遺構確認を行った。III層上面を確認した時点での掘削深度は現地表面から1mに達している。

III層上面では、溝跡、ピットが検出された。同面の調査終了ののち、人力によるIII層の掘り下げ作業を行いIV層上面での遺構確認作業に移った。

IV層上面では、一定の方向性を備える小溝が53条確認されており、これを小溝状遺構群とした。他に溝跡が検出されている。同面の調査終了ののち、再度人力による掘り下げを進め、V層上面での遺構の確認作業を行った。

V層上面では、溝跡、ピット、小溝状遺構群が検出された。小溝状遺構群は、溝数条がグループとなる群を形成しており、大別5群、細別9群を確認した。南北方向で1群、東西方向で大別4群、細別8群が確認されており、南北方向の小溝状遺構群が新しい。また、各々1条のみであるが、東西方向のものに切られる南北方向の小溝状遺構1条と東西方向の小溝状遺構を3条検出している。新旧関係を明らかにしたのち、新しい遺構から順次完掘、記録を行った。

全ての遺構を掘り下げた後、さらにV層下位での遺構・遺物の有無を確認するため、調査区の東南隅に4m×2mのトレンチを設定して調査を行った。VI層上面でピット5基が確認されたため記録し、さらに下位を調査するため東南隅1m×2mを掘り下げ、縄文時代の包含層であるVII層での遺構・遺物の確認作業を行い、VIII層上面までの確認を行ったが、遺構は確認されず、遺物も出土しなかった。最終的に基本土層および調査区壁面の断面図の記録を行い調査を終了した。



第3図 調査区・グリッド設定図

[検出遺構の記録]

調査区および検出遺構を図化するため、調査区の周辺に日本測地系直角平面座標系第X系に沿った基準点を移設した後、調査区の脇に測量基準点を幾つか移設した。座標系に従い調査区を取り囲むグリッドを設定し、調査区内に5m四方のグリッド杭を設置した。グリッドは北西角を1グリッドとし、順次番号を付した。また、仙台市富沢駅周辺開発事務所設置の基準杭を基準とする水準点 (B.M 11.8m) を場内に設置した。遺構平面図は、トータルステーションによる測量で作成した。遺構断面図は1/20の実測図を作成した。

遺構番号は検出順に付した。小溝状遺構については後日、新旧関係・組み合わせを検討し室内整理作業時に付したものである。

遺物の取り上げは遺構ごとに行ったが、遺構外出土のものについては、基本層ごとにグリッド単位で行い、出土位置を記録している。

写真による記録は、35mmカメラを使用し、モノクロ、カラーリバーサルフィルムを用いた。また、高画素解像度仕様のデジタルカメラを使用し、通常撮影に加えデジタル測量用の撮影を行った。

第4章 基本層位

調査区での基本層位は、I層から主だった遺構の最終検出面であるV層までの大別5層、細別6層を確認し、また下層調査ではVI層以下VIII層までの9層を確認した。

盛土：調査地付近は、近年、区画整備・宅地造成のために山砂により整地している。その層が0.7～1.2m程の厚さである。

I層：I層は現代の水田耕作土である。層厚は5～20cmの明褐色 (7.5Y 7/2) 粘土質シルト。I b層の層厚は5cm程であるが残存は悪い。土壌の攪拌により酸化が帯びやや赤色化の傾向にある。

II層：層厚は2～10cmの黒色 (10 YR2/1) 粘土質シルト。マンガン粒を斑状に含む。

III層：層厚は5～20cmのにぶい黄橙色 (10 YR7/3) 粘土質シルト。マンガン粒を斑状に含む。灰白色火山灰を斑状に含む。本層上面は、中世の遺構確認面とされている。

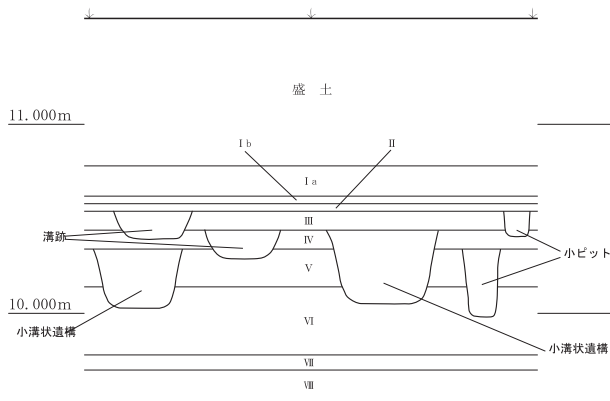
IV層：層厚は5～20cmの褐色 (10 YR5/1) 粘土質シルト。マンガン粒を斑状に含む。

V層：層厚は20～30cmのにぶい黄橙色 (10 YR6/3) 粘土質シルト。周辺調査では本層上面にて古墳の周溝を検出している。

VI層：層厚は40cm程のにぶい黄橙色 (10 YR6/4) 砂質シルト。下位の粒子が粗くなる。

VII層：層厚は5cm程の黒褐色 (10 YR3/2) 粘土質シルト。縄文時代の遺物包含層にあたる。

VIII層：層厚の確認に至っていない。にぶい黄橙色 (10 YR6/3) 砂質シルト。



層位	土色	土性	備考
I a	7.5Y7/2 明褐色	粘土質シルト	現代の水田耕作土
I b	7.5Y7/2 明褐色	粘土質シルト	I aと同等 酸化により赤褐色化
II	10YR2/1 黒	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄を含む
III	10YR7/3 にぶい黄橙	粘土質シルト	マンガン、酸化鉄を含む 灰白色火山灰を含む
IV	10YR5/1 褐色	粘土質シルト	上面にマンガンを含む
V	10YR6/3 にぶい黄橙	粘土質シルト	粘性強い 黄褐色粘土粒を含む 下層が明るい
VI	10YR6/4 にぶい黄橙	砂質シルト	径数mmの砂粒、酸化鉄を含む
VII	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	粘性強い炭化物を微量含む
VIII	10YR6/3 にぶい黄橙	砂質シルト	径数mmの砂粒を含む

第4図 基本層位模式図

第5章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

(1) III層上面検出遺構

1. 溝跡

SD1 溝跡

SD1は、東西方向に直線的に延びる溝跡である。SD2・SD3とほぼ直交しており、各々の遺構を切っている。方向軸は概ねE-8°-Sである。確認長15.0mを測る。上端幅28~44cm、下端幅22~36cm、深さは15cm程である。底面はほぼ平らで、壁面の立ち上りは緩やかである。堆積土は明褐灰色粘土質シルトを主体とし、II層をブロック状に含んでいる。遺物は須恵器の破片1点が出土した。

SD2 溝跡

SD2は、調査区を南北方向に直線的に延びる溝跡である。SD1に切られる。確認長11.0mを測る。方向軸はN-2°-Eでほぼ真北を示す。上端幅32~56cm、下端幅26~44cm、深さは10cm程である。底面はほぼ平らで、壁面の立ち上りは緩やかである。堆積土は黒色粘土質シルトのI層のみでII層をブロック状に含んでいる。調査区北壁面及び南壁面で観察でき、III層上面から掘削されていることが確認できる。遺物は出土しなかった。

SD3 溝跡

SD3は、溝長1.8mでSD1と交差する地点から南側は遺構プランの確認はできない。上端幅32cm、下端幅26cm程で、深さは5cm程である。底面は平らで、壁面はやや垂直ぎみに立ち上る。堆積土は黒色粘土質シルトのI層のみでII層をブロック状に含んでいる。調査区北壁面の観察では、III層上面から掘削されていることが確認できる。SD3はSD2の東側1mの間隔をおいて平行してみられる。遺物は出土しなかった。

2. 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構

SX1は、東西方向に長軸を備える不整形の遺構である。調査区の中央付近に位置する。確認長3.8mを測る。溝幅50~80cm程、深さ10cm程である。底面はほぼ平らで硬く締まっている。壁面の立ち上りは緩やかである。堆積土は硬く締まる。主体土は黒色粘土質シルトでII層をブロック状に含んでいる。中央にはI層が溝状に入り込み、上位面から圧入した様子が窺えた。遺物は出土しなかった。

南側にSX2が平行に並んでおり、両遺構間は1.2m程である。SX1とSX2の間および西側の検出面は他より硬く締まっており、砂粒・小礫の混入が多い。

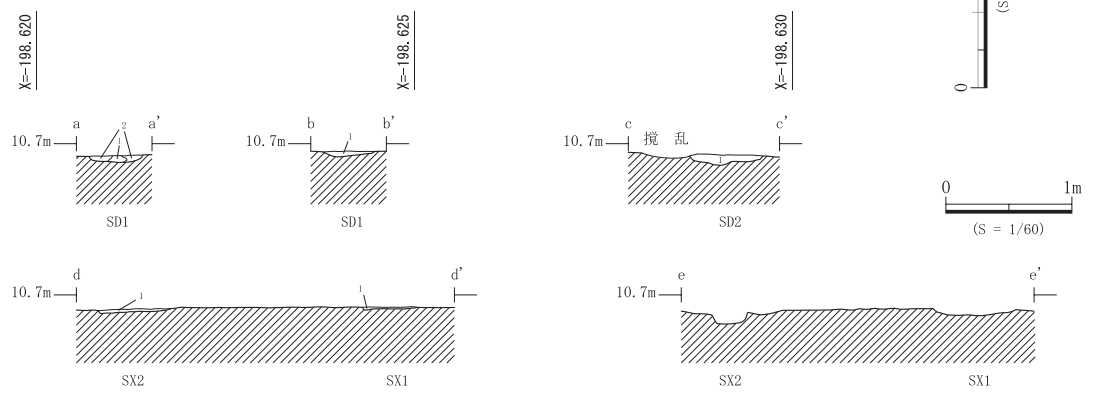
SX2 性格不明遺構

SX2は、東西方向に長軸を備える不整形の遺構である。調査区の中央付近、SX1の南側1.2mに位置する。確認長2.4mを測る。溝幅50~70cm程、深さ5~20cm程である。底面は硬く締まっており、上位面から攪拌された影響から凹凸がみられる。壁面の立ち上りはやや垂直ぎみである。堆積土は硬く締まり、上位面から圧入された影響がみられI層が入り込んでいる状況がみられた。主体土は黒色粘土質シルトでII層をブロック状に含んでいる。

SX1・SX2は、遺構の中央にI層の混入がみられ、それは平行に並ぶものであった。これを攪乱として除去したが、近年の荷車などの轍である可能性がある。SX1・SX2は轍などの上位からの圧入により形成されたものと考えられる。遺物は出土しなかった。

3. ピット

4基検出された。いずれも平面形は円形を呈する。掘り込みは浅い。柱痕跡は確認されておらず性格は不明である。



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
SD1	1	7.5YR7/1 明褐灰	粘土質シルト	II層土 黒色シルトブロック・砂を含む	SX1	1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	橙色粒・灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む
	2	10YR2/1 黒	粘土質シルト	灰白色粒子・マンガン粒子を含む	SX2	1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む
SD2	1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	橙色粒・灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む					

第5図 III層上面遺構配置図・断面図

(2) IV層上面検出遺構

1. 溝跡

SD4 溝跡

SD4は、調査区の西北―東南へやや屈曲し走る溝跡である。小溝状遺構群1群の小溝と重複し、これを切っている。確認長は概ね12.6mを測る。調査区北壁面で観察される。調査区東壁面では、攪乱を受けており確認できなかったが、それぞれに延長すると考えられる。方向軸は概ねW-42°-Nである。上端幅30~44cm、下端幅12~18cm、深さ20cm程である。底面はやや丸底であり凹凸もみられる。壁面の立ち上りは緩やかであるが段を有し、テラス状の部分がみられる。堆積土は、1層は浅黄橙色粘土質シルトでⅢ層をブロック状に含んでいるもの、2層は灰黄褐色粘土質シルトを主体としている。最下層の3層は砂・小礫が堆積しており、水路の様子が窺えた。遺物は出土しなかった。

2. 小溝状遺構群

小溝状遺構群1群

IV層上面では、調査区のほぼ全域にわたり、幅が狭く、浅い小溝が東西方向に幾条も検出された。検出された小溝1~53を一括して群と捉えた。方向軸はE-4°-N近辺を示し概ね揃っている。小溝には、長軸の延長上に連続した配置が確認できるものもある。

IV層上面で検出した小溝は、Ⅲ層から掘り込まれた溝の底面付近が存在しているものと考えられ、残存部分のみで遺構規模を検討することはできない。各々の小溝には長短はあるが、長い溝で2.8m、短い溝で40cm程である。溝幅は10~20cm程、深さ5~10cm程である。小溝の間隔は密集する部分に関しては20~40cm程が確認できる。各々の小溝は、概ね同様の規模で掘削されているようである。底面はやや丸底で凹凸もみられる。断面形はU字形であり、壁面への立ち上りは緩やかで、ほぼ垂直に上がる。堆積土は、単層でⅢ層をブロック状に含むにぶい褐色粘土質シルトである。

遺構の性格としては、Ⅲ層が耕作土としての可能性のある畑或いは水田の耕作痕跡が考えられるが、Ⅲ層上での畝や畦畔などの遺構は検出されていない。

3. 性格不明遺構

SX3 性格不明遺構

SX3は、東西方向に長軸を備える不整形の遺構である。調査区の中央付近に位置する。確認長5.5mを測る。溝幅50~80cm程、深さ10cm程である。底面は平らで硬く締まっている。壁面の立ち上りはほぼ垂直である。堆積土は硬く締まる。主体土は黒色粘土質シルトでⅡ・Ⅲ層をブロック状に含んでいる。

SX4 性格不明遺構

SX4は、東西方向に長軸を備える不整形の遺構である。調査区の中央付近、SX3の南側1.2mに位置する。確認長6.3mを測る。溝幅50~70cm程、深さ5~20cm程である。底面は硬く締まっており、上位面から攪拌された影響から凹凸がみられる。壁面の立ち上りは緩やかである。堆積土は硬く締まり、上位面から圧入された影響がみられた。主体土は黒色粘土質シルトでⅡ・Ⅲ層をブロック状に含んでいる。

SX3・SX4は、各々がⅢ層上面で確認されたSX1・SX2の下位に位置している。SX1・SX2と同様に上位面から圧入された硬く締まった堆積土であり、IV層上面においても、SX3・SX4の間および西側の検出面は硬く締まっているのが観察される。このことから、SX3・SX4はSX1・SX2と同じ要因により生じたもので、基本層全体が押し下げられた結果、各面においてこのような状況が生じたものと考えられる。

SX3・SX4は、小溝状遺構群1群の小溝を切っている。遺物は出土しなかった。



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
SD4	1	10YR8/4 浅黄橙	粘土質シルト	小礫・砂粒・灰白色シルトブロックを含む	小溝状遺構群1群	1	7.5YR6/2 にふい褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む
	2	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む	SX3	1	10YR1.7/1 黒	粘土質シルト	橙色粒・灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む
	3	10YR8/3 浅黄橙	粘土質シルト	砂粒・灰白色シルトブロックを含む	SX4	1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む

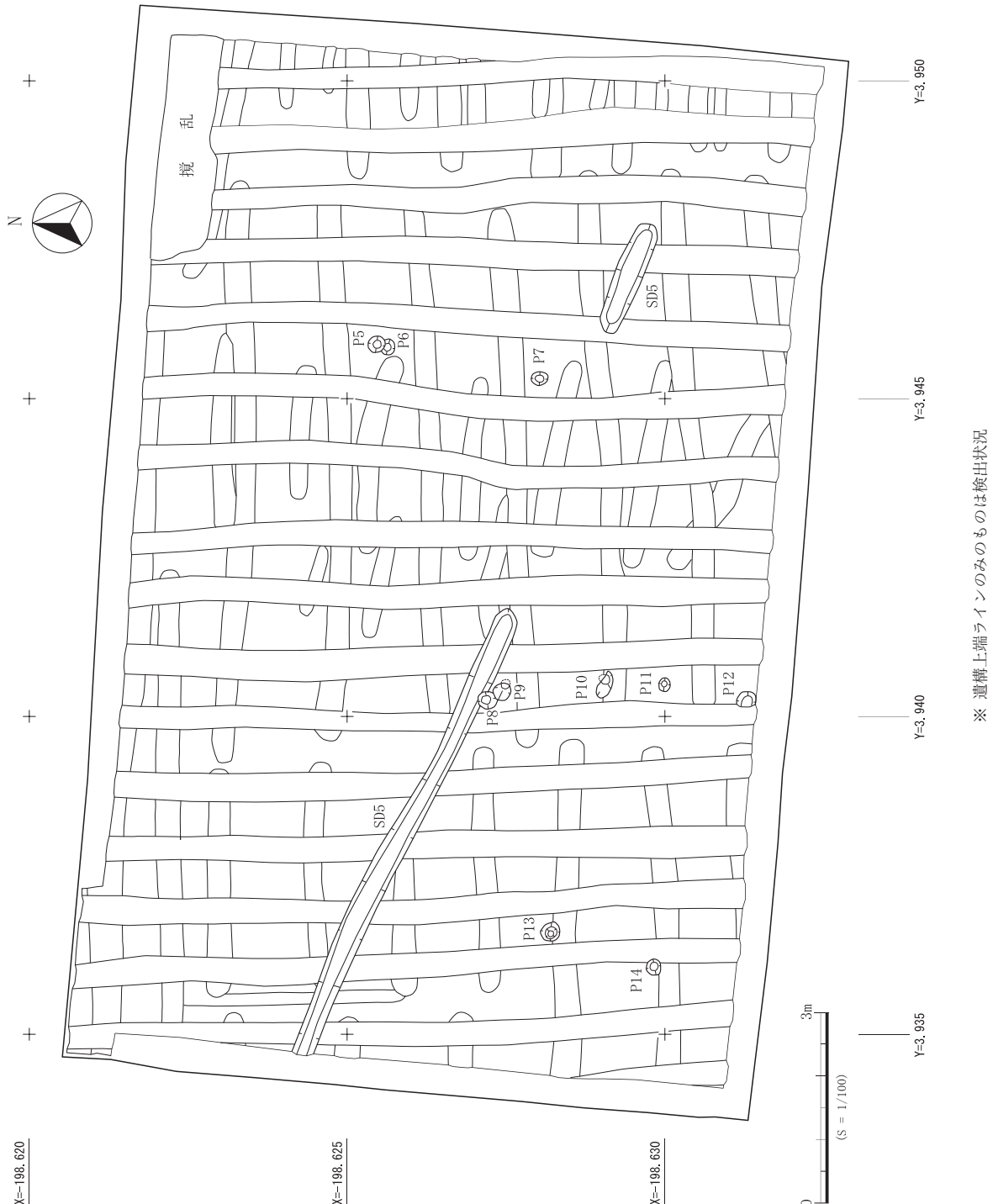
第6図 IV層上面遺構配置図・断面図

(3) V層上面検出遺構

1. 溝跡

SD5 溝跡

調査区の西北隅－東南隅へ走る溝跡である。検出はV層上面であったが、調査区西壁面の観察によると、IV層上面から掘削されていることが確認できる。V層上面で検出された他の遺構を切っている。調査区中央付近では遺存状態が悪いため途切れているが、確認長14.4mを測る。調査区東壁面では、攪乱を受けており確認できなかったが、概ね東西それぞれに延長すると考えられる。方向軸は概ねE-25°-Sである。上端幅32~44cm、下端幅16~28cm、深さ10cm程である。底面はほぼ平らで、壁面の立ち上りは緩やかである。堆積土にはぶい燈色粘土質シルトの1層のみでV層をブロック状に含んでいる。V層上面で検出された遺構の下位には、概ねこの土が堆積しており、

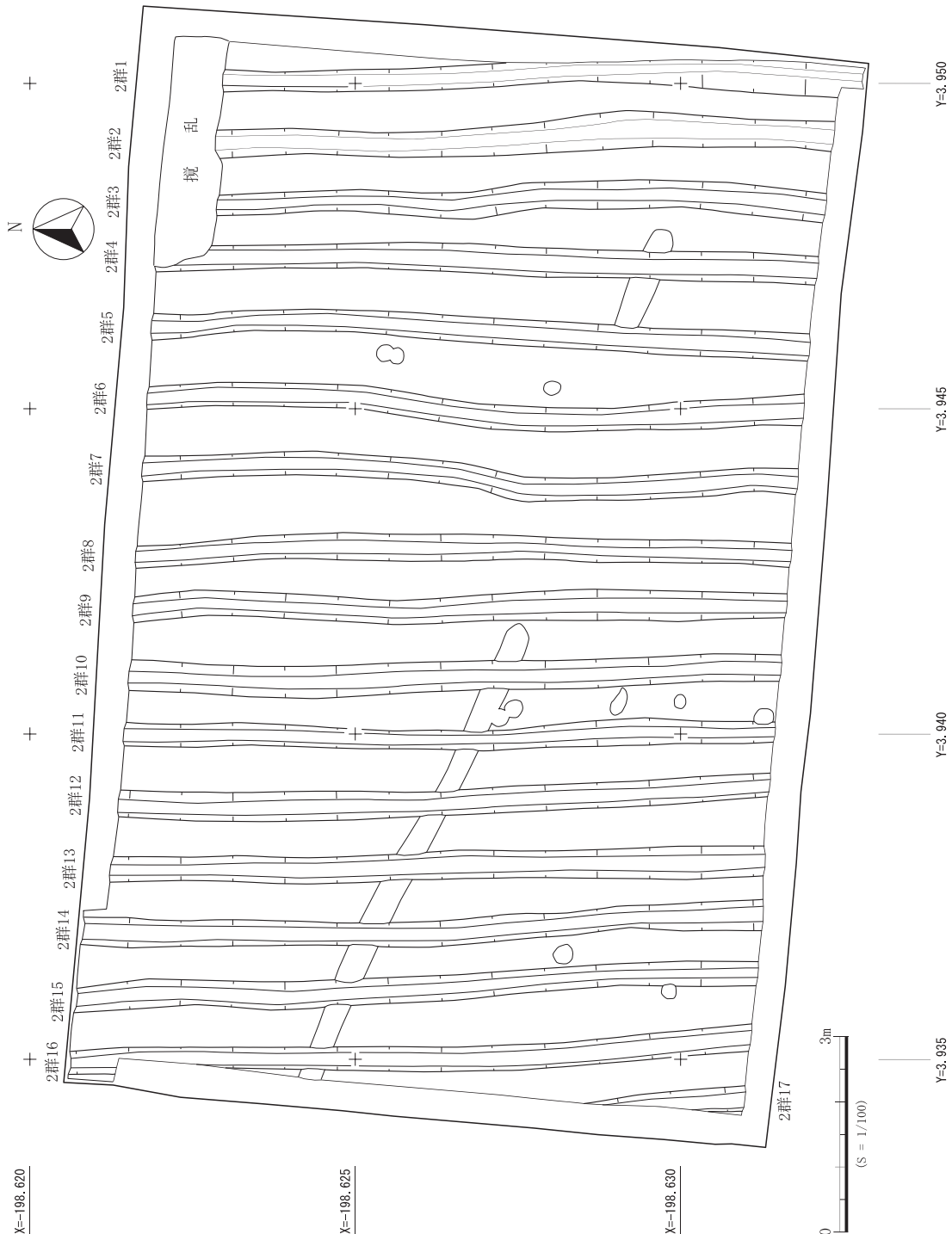


第7図 V層上面遺構配置図① SD5・ピット

遺構底面付近の埋土の特徴として認めることができる。遺物は出土しなかった。

2. 小溝状遺構群

V層上面で検出された小溝状遺構は、調査区の各壁面での断面観察から、そのほとんどはIV層上面からの掘り込みが確認できたが、平面的なプランの確認はできなかった。小溝状遺構群は大別5群、細別9群、1条のみ検出の小溝状遺構4条に分けられる。遺構の切り合いから、南北方向の2群が最も新しく、東西方向の各群を切っている。これら小溝状遺構（群）としたものは、周辺の調査成果から遺構の性格として畑の耕作痕跡が考えられている。本調査の場合、狭小な調査区であり、小溝の数による群の構成単位は不明であるが、方位が真北である2群・7、他がそれに直交するようにほぼ東西を示している傾向が明らかであった。

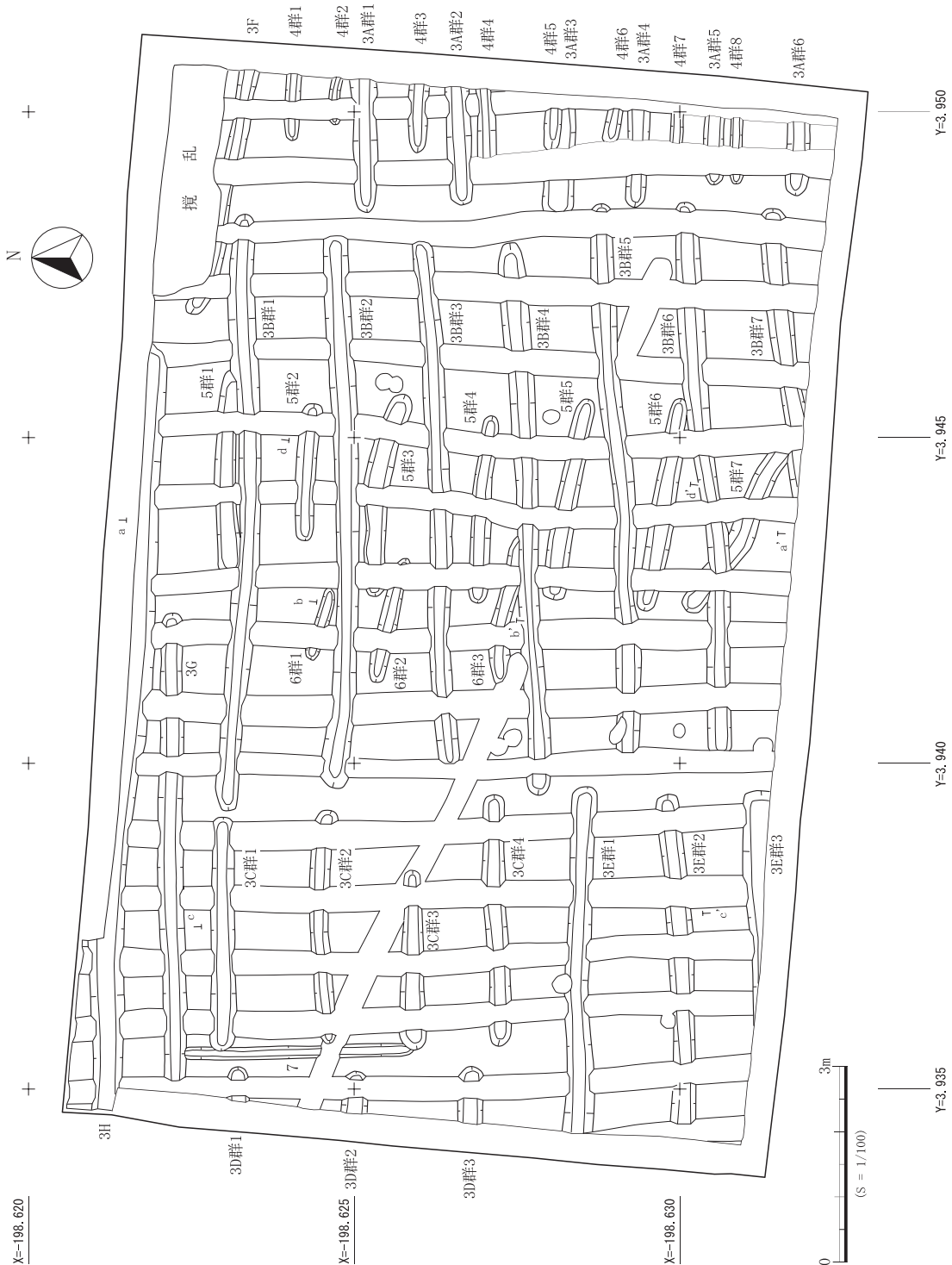


第8図 V層上面遺構配置図② 小溝状遺構群（2群）

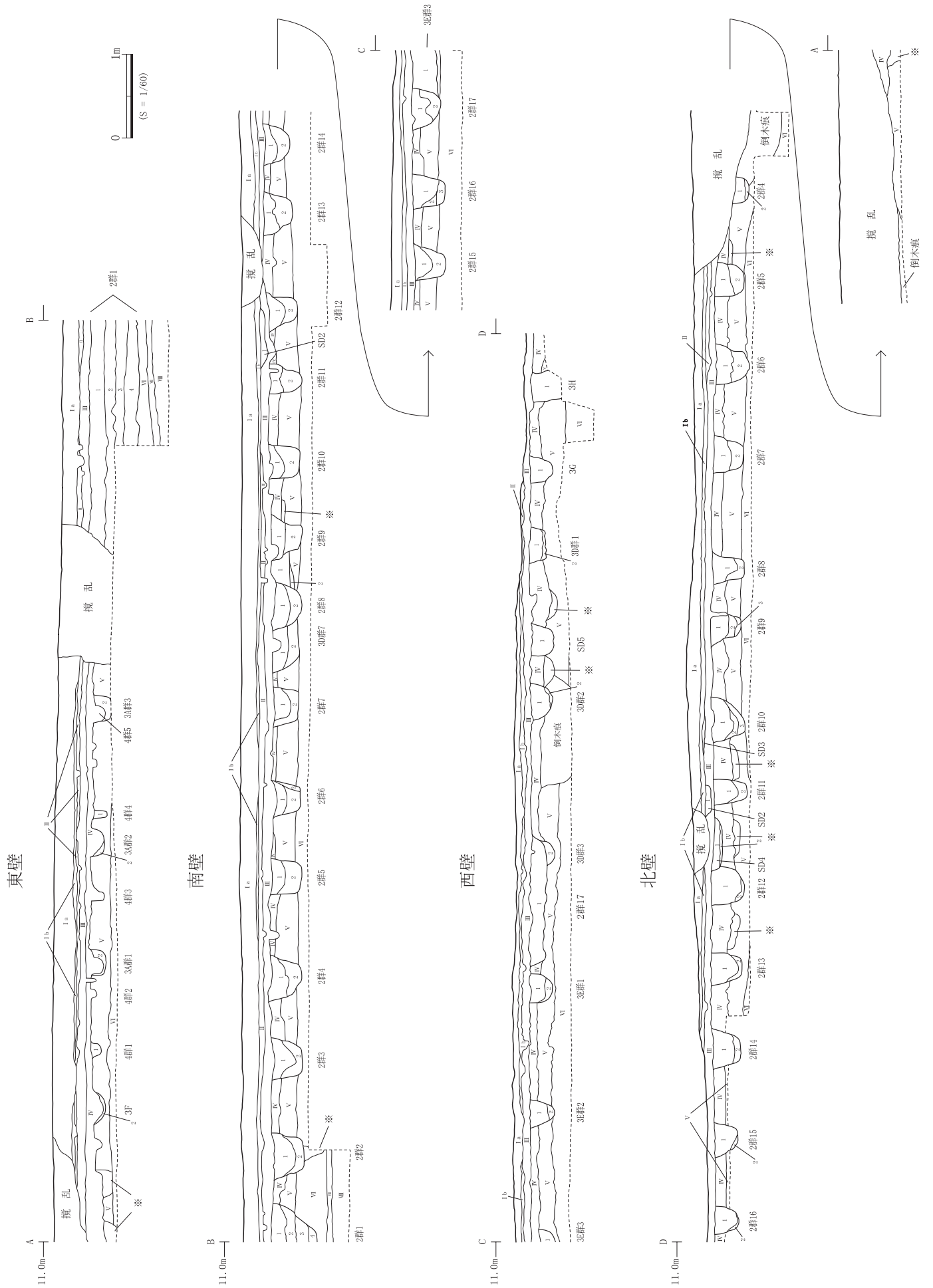
小溝状遺構群2群

南北方向に長軸を備える。調査区内で小溝17条を検出しているが全容はつかめない。概ね、検出長10.4m、上端幅36~50cm、下端幅20~28cm程である。IV層上面からの掘削が確認でき、その面からの深さは50~60cm程である。溝間の幅は40~80cm程であるが、概ね60cm前後を測る。堆積土は、上位にIV層をブロック状に含む褐灰色粘土質シルト、下位にV層をブロック状に含むにぶい黄橙色粘土質シルトの2層が主体となる。

調査区東側で検出されている2群1~7では、やや屈曲する部分が見られる。それらは3.5~4.0mの部分で観察できる。また2群の他の溝を観察すると、中央付近では明らかな段差こそみられないが、北側に向かって掘り込みが浅くなる傾向が窺えた。明確ではないが、これらの傾向から考えると、耕作形態の変化などで配列が部分的に不



第9図 V層上面遺構配置図③ 小溝状遺構群(3~6群・7)



第10図 小溝状遺構群断面図 (調査区壁面)

遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
小溝状遺構群2群	1	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	灰白色粒子を含む	小溝状遺構群3E群	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む
	2	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	灰白色粒子を含む		2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む
	3	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを含む		1	10YR6/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	上位に黒褐色シルト多い 灰白色シルト粒を含む
	4	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	黄褐色・灰白色粒子を含む		1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む
小溝状遺構群3A群	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む	小溝状遺構群3H	1	7.5YR4/1 褐灰	粘土質シルト	黄褐色・灰白色粒子を含む
	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む		1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む
小溝状遺構群3B群	1	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む	SD2	1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	褐色粒・灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む
	2	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む		1	10YR2/1 黒	粘土質シルト	褐色粒・灰白色シルト粒子・マンガン粒子を含む
小溝状遺構群3C群	1	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む	SD4	1	10YR8/4 浅黄褐色	粘土質シルト	小礫・砂粒・灰白色シルトブロックを含む
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む		2	10YR5/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む
小溝状遺構群3D群	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む	SD5	1	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	上位に褐色シルト多い 灰白色シルト粒を含む
	2	10YR6/2 灰黄褐色	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む					

第1表 小溝状遺構群土層観察表（調査区壁面）

規則になっているものと考えられる。概ね東西方向の小溝状遺構群よりも掘削深度は深い。

小溝状遺構群 3群

3群は、3A群～3E群の小溝状遺構群と3F～3Hの小溝状遺構の細別5群と単独の溝3条が確認された。これらは、方位軸が同等で重複していないため、ほぼ同時期での耕作の単位として観察できるようである。各々の群を総括して小溝状遺構（群）として捉えた。

3A群：調査区東側で小溝6条を検出した。2群3と重複する付近で西側先端が立ち上がる。検出長2.1m程、幅32～48cm、深さ20～32cm、溝間幅1m程である。4群の溝に切られる部分が確認できる。調査区東壁面の観察ではIV層上面までの立ち上りはみられない。堆積土の上位はIV層をブロック状に含む暗褐色粘土質シルトが主体である。

3B群：2群3～2群11の間で小溝7条を検出した。検出長9.2m、幅36～42cm、深さ36～52cm、溝間幅1m程である。堆積土は、上位にIV層をブロック状に含む黒褐色粘土質シルト、下位にV層をブロック状に含む褐灰色粘土質シルトの2層が主体となり、にぶい黄褐色シルトブロックを含むやや明るい3層がみられる小溝がある。延長方向は3A群の溝間の位置にあたる。また3C群とは、ほぼ延長線上に連なっている。3B群7を除いて、概ね2群よりも掘削深度が深い。

3C群：2群11～2群16の間で小溝4条を検出した。検出長3.9m、幅32～38cm、深さ36～44cm、溝間幅1m程である。堆積土は、上位にIV層をブロック状に含む暗褐色粘土質シルト、下位にV層をブロック状に含む灰黄褐色粘土質シルトの2層が主体となる。7群を切っている。3C群1は、2群よりも掘削深度が深い。

3D群：調査区西壁際で小溝3条を検出した。2群16と重複する部分から西側に延びる。検出長0.9m、幅32～42cm、深さ42cm、溝間幅1.4m程である。IV層上面からの掘り込みである。延長方向は3C群の溝間の位置にあたる。

3E群：2群11～2群17の間で小溝3条を検出した。検出長5.3m、幅38～44cm、深さ26～48cm、溝間幅1.1m程である。堆積土は、上位にIV層をブロック状に含む暗褐色粘土質シルト、下位にV層をブロック状に含む灰黄褐色粘土質シルトの2層が主体となる。IV層上面からの掘り込みである。3E群1・2は、2群よりも掘削深度が深い。

3F：調査区北東隅部で小溝1条を検出した。検出長3.9m、幅26cm、深さ24cm程である。北側に群を形成する小溝が検出される可能性がある。調査区東壁面の観察ではIV層上面までの立ち上りはみられない。

3G：調査区北西部で小溝1条を検出した。検出長7.3m、幅40cm、深さ20cm程である。北側に群を形成する小溝が検出される可能性がある。小溝状遺構群7群を切っている。

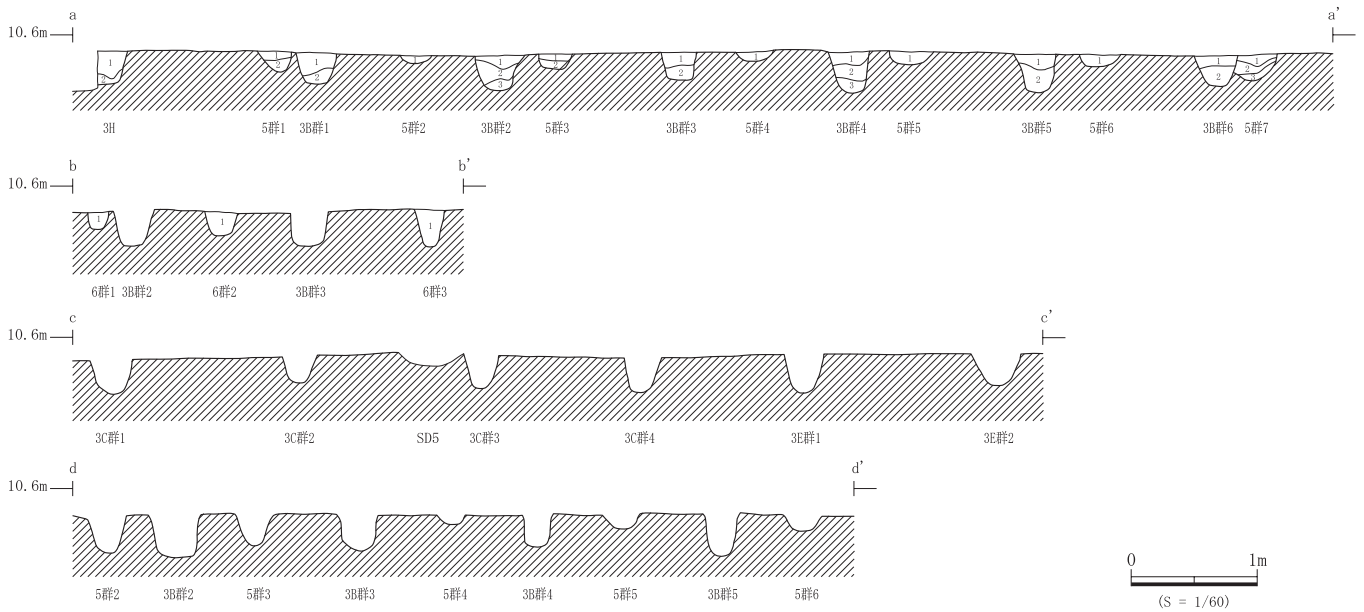
3H：調査区北壁際で小溝1条を検出した。検出長11.8m、幅52cm、深さ42cm程である。北側に群を形成する小溝が検出される可能性がある。IV層上面からの掘り込みである。2群よりも掘削深度が深い。

小溝状遺構群3A群～3E群は、小溝の幅、小溝間の距離に近似した傾向があり、各々の群が耕作の単位として推定できる。東から3A群→3B群→3C群・3E群、3C群→3D群が、各々の重複を避けるような配置が認められる。

- ・3A群→3B群では、長軸の延長上では溝の先端で10cm程が重複する位置関係にあるが、概ね溝幅1本分に相当する40cm程北側に3B群の小溝が位置しており、直接の重複を避けている。

- ・3B群→3C群 溝間幅10～30cm離れる。3C群の北側では同一線上にあるが、南側では3B群の溝間に位置している。

- ・3B群→3E群 長軸の延長上では溝の先端で10cm程が重複する位置関係にあるが、概ね溝幅2本分に相当する80cm



遺構	層位	土色	土性	備考	遺構	層位	土色	土性	備考
小溝状遺構群3B群	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	灰白色粒子を含む	小溝状遺構群5群	1	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	黄褐色・灰白色・黒色粒子を含む
	2	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む		2	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土質シルト	灰白色ブロック・黒色粒子を含む
	3	10YR6/3 にぶい黄橙	粘土質シルト	灰白色シルトブロックを含む		3	10YR6/3 にぶい黄橙	粘土質シルト	灰白色粒子を含む
小溝状遺構群3H	1	7.5YR4/1 褐灰	粘土質シルト	黄褐色・灰白色粒子を含む	小溝状遺構群6群	1	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土質シルト	灰白色ブロック・黒色粒子を含む
	2	10YR7/4 にぶい黄橙	粘土質シルト	黄褐色シルトブロックを含む					

第11図 小溝状遺構群断面図

程南側に3E群の小溝が位置しており、直接の重複を避けている。

- ・3C群→3D群 溝間幅20～30cm離れる。溝幅1本分に相当する40cm程南側に3D群の小溝の配置がみられる。

3群は、調査区壁面の観察から、IV層上面から掘削が確認できる。IV層上面からの掘り込みがみられない3A群・3Fについては、掘削過程の相違により壁の立ち上りの状況が異なったものと考えられる。3B群・3C群については、同時期の群となることからIV層上面から掘削が確認できた可能性がある。

小溝状遺構群4群

調査区東側で小溝8条を検出した。2群2と重複する付近で西側先端が立ち上がる。検出長1.1m、幅16～24cm、深さ12～24cm、溝間幅60cm程である。3A群とほぼ同間隔の配列で重なっているものがあり、3A群を切っている。掘り込みはIV層上面からの掘削として確認されていないが、3A群と同様に他の小溝状遺構群との掘削過程の相違が表れたものと考えられる。

小溝状遺構群5群

調査区中央で小溝7条を検出した。検出長3.3m、幅30～40cm、深さ10～36cm、溝間幅1.2m程である。他の小溝状遺構群に比べ溝長がやや短く南方向に軸が傾いている。3B群に切られ、それより古い時期に相当する。5群7は、方位軸が異なるが、配列・規模から同群に関連するものとして捉えた。

小溝状遺構群6群

調査区中央で小溝3条を検出した。検出長2.0m、幅20～32cm、深さ22～32cm、溝間幅70cm程である。他の小溝状遺構群に比べ溝長がやや短く南方向に軸が傾いており、同様の軸を備える5群の溝間に挟まるように位置している。3B群に切られ、それより古い時期に相当する。

小溝状遺構群5群と6群は、長軸の延長上では各々の溝長の1/3程が重複する配置である。概ね溝幅1本分に相当する40cm程南側に6群の小溝が位置しており、重複を避けるような配置が認められる。

小溝状遺構7

調査区西側端で小溝1条を検出した。南北方向に長軸を備える。検出長3.5m、幅20cm、深さ6cm程である。堆積土は単層でIV層をブロック状に含む暗褐色粘土質シルトである。3C群に切られており、それより古い時期の遺構

遺構名	溝番号	長さ×幅×深さ (cm)	特徴	遺構名	溝番号	長さ×幅×深さ (cm)	特徴	
小溝状遺構群 2 群	1	(980) × 36 × 86(64)	3.5~4.0mで屈曲する	小溝状遺構群 3C群	2	360 × 32 × (36)	SD5に切られる・小溝状遺構 7を切る	
	2	(950) × 58 × 58(42)	3.5~4.0mで屈曲する		3	280 × 38 × (42)	SD5に切られる・小溝状遺構 7を切る	
	3	(940) × 44 × 56(42)	3.5~4.0mで屈曲する		4	390 × 38 × (44)		
	4	(1020) × 46 × 58(48)	3.5~4.0mで屈曲する SD5に切られる		小溝状遺構群 3D群	1	(60) × 32 × (16)	
	5	(1010) × 40 × 56(48)	3.5~4.0mで屈曲する SD5に切られる			2	(70) × 42 × 42(24)	
	6	(1010) × 42 × 56(42)	3.5~4.0mで屈曲する			3	(90) × 38 × 42(24)	
	7	(1000) × 38 × 46(38)	3.5~4.0mで屈曲する		小溝状遺構群 3E群	1	(530) × 44 × 46(32)	P13に切られる
	8	(1000) × 42 × 56(44)	3.5~4.0mで屈曲する			2	(510) × 38 × 48(42)	P14に切られる
	9	(1000) × 40 × 58(40)	3.5~4.0mで屈曲する			3	(360) × (38) × (26)	
	10	(1000) × 50 × 60(40)	3.5~4.0mで屈曲する SD5に切られる		小溝状遺構群 3F	1	(390) × 26 × (24)	
	11	(1000) × 42 × 62(46)	SD5に切られる・P10に切られる		小溝状遺構群 3G	1	(730) × 40 × (20)	小溝状遺構 7を切る
	12	(1000) × 46 × 60(44)	SD5に切られる		小溝状遺構群 3H	1	(1180) × 52 × (42)	
	13	(1000) × 52 × 56(42)	SD5に切られる		小溝状遺構群 4 群	1	(100) × 22 × (20)	
	14	(1040) × 48 × 48(38)	SD5に切られる			2	(80) × 16 × (12)	
	15	(1040) × 44 × 62(46)	SD5に切られる			3	(110) × 24 × (24)	
	16	(1040) × 38 × 62(44)	SD5に切られる			4	(110) × 24 × (24)	
	17	(260) × 38 × 58(42)				5	(60) × 18 × (16)	小溝状遺構群 3A群3を切る
小溝状遺構群 3A群	1	(210) × 38 × (32)		6		(50) × 22 × (16)		
	2	(180) × 38 × (22)		7		(50) × 18 × (10)		
	3	(160) × 48 × (26)	小溝状遺構群 4 群5に切られる	8		(100) × 20 × (12)		
	4	(150) × 26 × (26)		小溝状遺構群 5 群	1	(310) × 34 × (26)	小溝状遺構群 3B群1に切られる	
	5	(110) × 32 × (24)			2	110 × 30 × (10)		
	6	(120) × 38 × (20)			3	310 × 40 × (20)		
小溝状遺構群 3B群	1	920 × 42 × (40)	小溝状遺構群 5 群1を切る	4	290 × 32 × (12)			
	2	(850) × 40 × (46)		5	310 × 36 × (18)			
	3	(800) × 36 × (42)		6	330 × 38 × (16)	小溝状遺構群 3B群6に切られる		
	4	830 × 42 × (52)	SD5に切られる・小溝状遺構群 6 群3を切る	7	(280) × 40 × (36)	小溝状遺構群 3B群6に切られる		
	5	(840) × 40 × (48)		小溝状遺構群 6 群	1	116 × 20 × (22)		
	6	(840) × 42 × (40)	小溝状遺構群 5 群6・7を切る		2	200 × 24 × (32)		
	7	(440) × 38 × (36)			3	(240) × 32 × (48)	SD5・小溝状遺構群 3B群4に切られる	
小溝状遺構群 3C群	1	360 × 38 × (42)	小溝状遺構 7を切る	小溝状遺構 7	1	(350) × 20 × (6)	SD5・小溝状遺構群 3C群・3Gに切られる	

※ 計測値の () は、長さについては検出最大長、深さについてはV層検出面からの深さである。太字は、調査区内で規模が確定しているもの。
 ※ 特徴内の重複関係については、南北軸の小溝状遺構群2群は東西軸の各群と重複関係が明確なため記載していない。

第2表 小溝状遺構群観察表

である。

これらの小溝状遺構群は、V層上面で検出・調査したものであるが、調査区壁面の土層観察によると、ほとんどのものがIV層上面から掘削されていることが確認できる。一方、調査区東側の小溝状遺構群3A群・3Fと4群は、調査区壁面での土層観察ではIV層上面への立ち上りは確認できなかった。これについては、遺構形成時の掘削過程および利用状況の相違が表れたものと考えられる。3A群と3Fについては、他の3群と方位軸が同様で重複がみられないことから、形成時期はほぼ同時期と判断している。また、V層上面で検出された小溝状遺構群の堆積土は、下半分がV層をブロック状に含む褐色～黄褐色粘土質シルト、上半分が黒褐～褐灰色粘土質シルトを主体としており、小溝の形成・利用形態はほぼ同様であったと考えられる。

3. ピット

ピットはP5～P14の10基が検出された。いずれも平面形状は円形を呈する。掘り込みは浅い。P9・P10は斜方向に掘削されている。柱痕跡は確認されておらず性格は不明であるが、周囲で検出された遺構同様、耕作に関わるものの可能性もある。

4. その他

V層上面での平面確認はできなかったが調査区壁面の観察によると、V層上面からの落ち込みが数ヶ所で確認できた。しかし、堆積土は灰黄褐色粘土質シルトで、これらは小溝状遺構群の可能性もあるが、IV層下半にみられる基本層とも考えられ、今回遺構とはしなかった。(第10図 ※が相当)

(4) 下層調査

調査区の南東隅に4m×2mのトレンチを設定し調査を行った。下位の層で精査を行い、VI層上面でピット5基を検出した。ピット内の覆土は、暗褐色～黒褐色の粘土質シルトであり、土層観察からV層上面で確認できなかった遺構と判断したが、自然のもの可能性もある。調査を行った後、さらに下位の層の調査を行うため1m×2mを掘り下げⅧ層に至ったが、遺構及び遺物の検出はなかった。

第2節 出土遺物

遺物は、総点数17点であった。SD1から、須恵器破片が出土した以外は、遺構に伴い、時期を判断する資料は殆ど無かった。図示し得た遺物は4点である。

土師器 (C)

1は、土師器壺である。出土位置は調査区南壁面に沿う側溝内(14G)で出土層位はV層内である。ほぼ同位置で同個体の土器片4点が出土し復元個体となった。複合口縁壺の口縁部で口縁端部は摩滅しており明瞭でない。内・外面ともにナデ整形の後磨き調整が施される。下端部で屈曲しており有段の様子が窺える。古墳時代前期のものと考えられる。

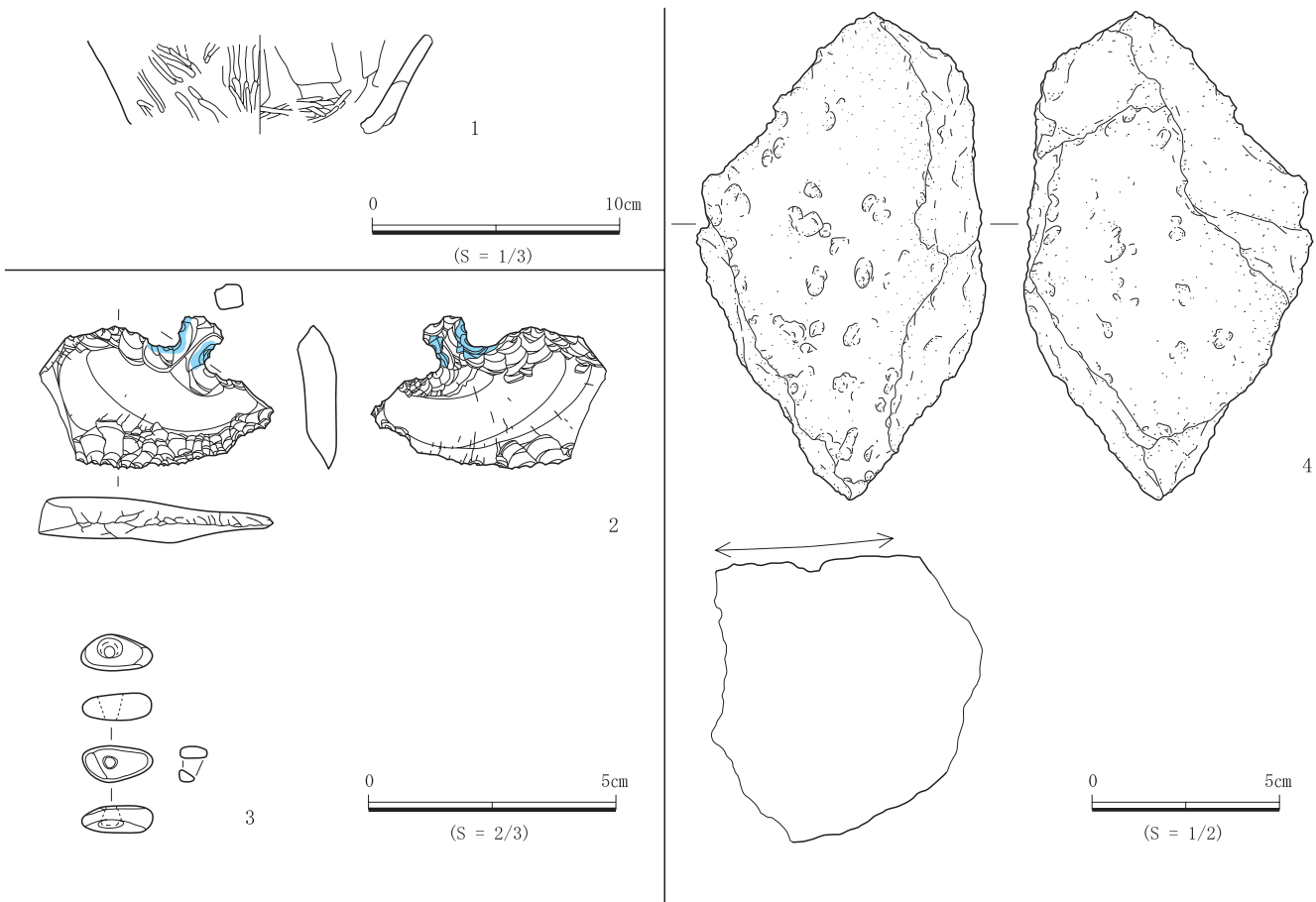
打製石器 (Ka)

2は、石匙である。V層上面検出時に出土した。出土位置は2G。出土層位はIV層内である。横型である。茎部が刃部中央やや右寄りに位置する。刃部および茎部付近の縁辺は細かく作り出される。茎部にアスファルトの痕跡がみられる。

石製品 (Kd)

3は、垂飾品である。V層上面検出時に出土した。出土位置は9G。出土層位はIV層内である。穿孔部分は広口3mm、小口1.5mm。色調は青緑色である。全体的に研磨されたようであるが、摩滅が激しく本来の形態は不明である。

4は、石皿とみられるが全体の形状は不明である。小溝状遺構群 2群10の底面から出土した。端部の破片であるがわずかに擦痕がみられる。



図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	口径×底径×器高 (mm)	外面調整	内面調整	備考	写真図版番号	
1	C1	14G	V層	土師器	壺	- × - × (40)	ナデ→タテヘラミガキ	ナデ ロ縁下端ヨコヘラミガキ		5-1	
図版番号	登録番号	出土地区	出土層位	種別	器種	長さ×幅×厚さ (mm)	重量 (g)	石材	使用痕	備考	写真図版番号
2	Ka1	2G	IV層	打製石器	石匙	39 × 47 × 9	10.7	珪質頁岩	茎部にアスファルト付着 (トーンで表示)		5-2
3	Kd1	9G	IV層	石製品	垂飾品	(14) × (8) × (6)	1.0	蛇紋岩	穿孔有り		5-3
4	Kd2	小溝状遺構群2群10	2層	石製品	石皿?	(131) × (78) × (77)	(691.7)	安山岩	擦痕有り		5-4

第12図 出土遺物図

第6章 まとめ

[検出された遺構について]

大野田古墳群は名取川下流の北岸部に形成された自然堤防状の微高地を含む後背湿地に立地する。今回の調査区は古墳群の南寄りに位置しているが、これまでの調査で確認されている古墳の群集する地区からは離れており、古墳及び古墳に関わる遺構・遺物の検出はなかった。大野田古墳群では、これまで遺跡内の各所で調査が行われている。本調査区を取り囲む区画道路整備に伴う調査が行われており報告されている。以下では、その際に検出された遺構との関連を中心に整理してみる。

Ⅲ層上面検出遺構

周辺の調査で検出された3H区SD145、3L区SD152は、各々がほぼ真北に方位を示し同一直線上にみられ、遺構規模（溝上端幅）も同等値であることから同一の溝跡である可能性が示唆されている。本調査区で検出されたSD2は、SD145・SD152の同一直線上の中間に位置していることから、これらと同一の遺構と考えられる。SD2に並行するSD3、直交するSD1については本調査区のみ検出である。周辺調査では、小溝状遺構群と同様に畑の耕作痕と考えられるピット列が検出されており、これらの遺構もまたは何かしら畑耕作に関連する可能性がある。

Ⅳ層上面検出遺構

遺跡内でのⅣ層の状況は、層厚が20cm以上と厚い箇所がある反面、上層による影響などで全く残存しない箇所も見受けられ、Ⅳ層土壌の性格上、これまで遺構の検出例は殆ど無い。またⅣ層は古墳周溝の上層に堆積し、出土遺物などから、古墳時代後半から奈良時代を中心に形成されたものとみられている。

本調査では溝跡1条、小溝状遺構群1群を検出した。小溝状遺構群はⅤ層上面検出のものとは溝自体の規模、形状が異なる他、配列自体にも大きな違いが見られる。小溝群の堆積土はほぼⅢ層により構成されており、断面観察でもその違いは認められなかった。このような事から考えると、Ⅳ層上面検出の小溝状遺構群はⅢ層土壌が何かしらの耕作をなされたことにより生じた耕作土底面の痕跡で、下層検出の小溝群同様、耕作状況によってはⅢ層上面で検出される可能性もあるものと考えられる。したがって、Ⅴ層上面検出の小溝状遺構群の多くが本来はⅣ層面で検出されるべきものであっても、これらを時期的、性格的に小溝群1群と同様のものとみなす事はできない。

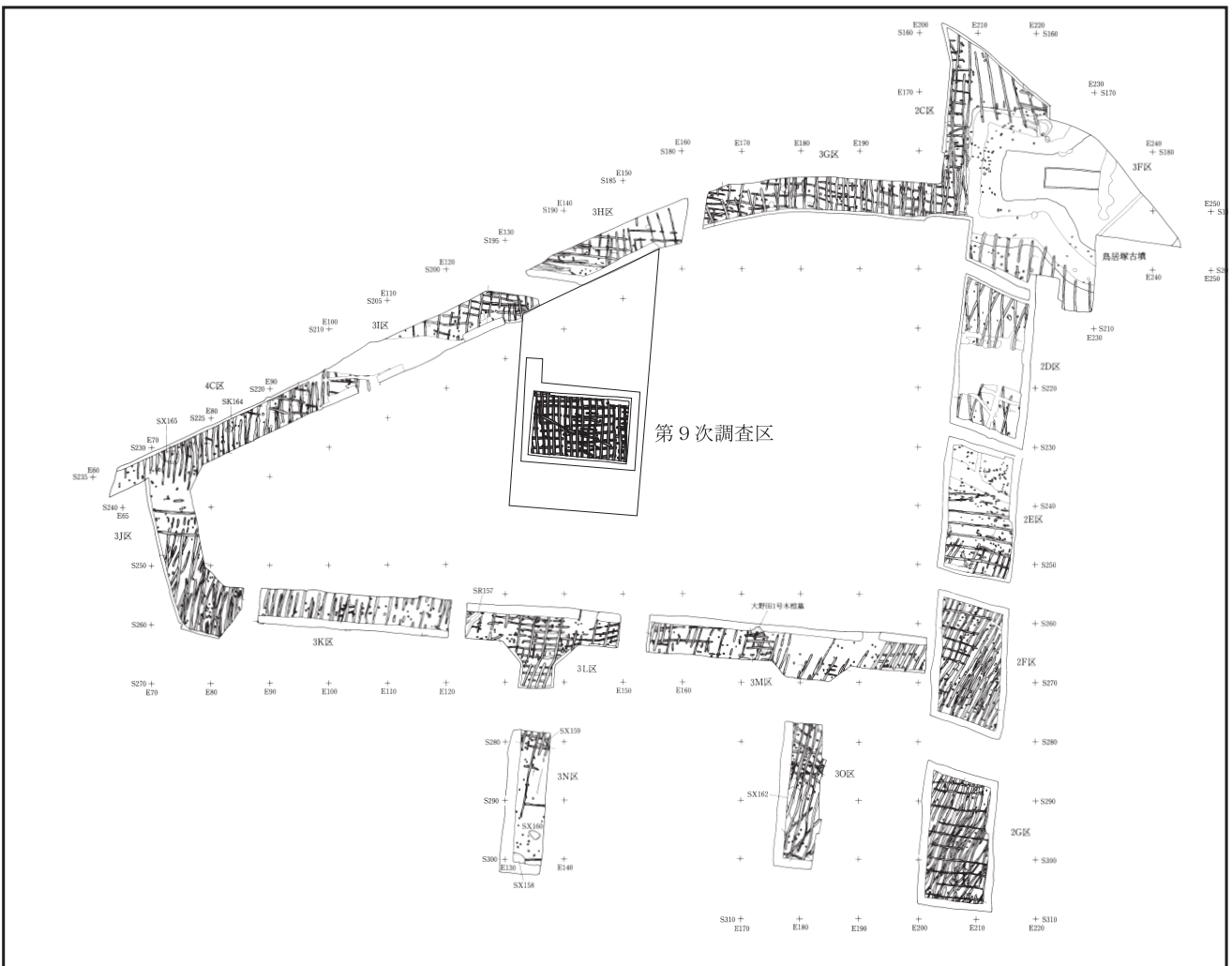
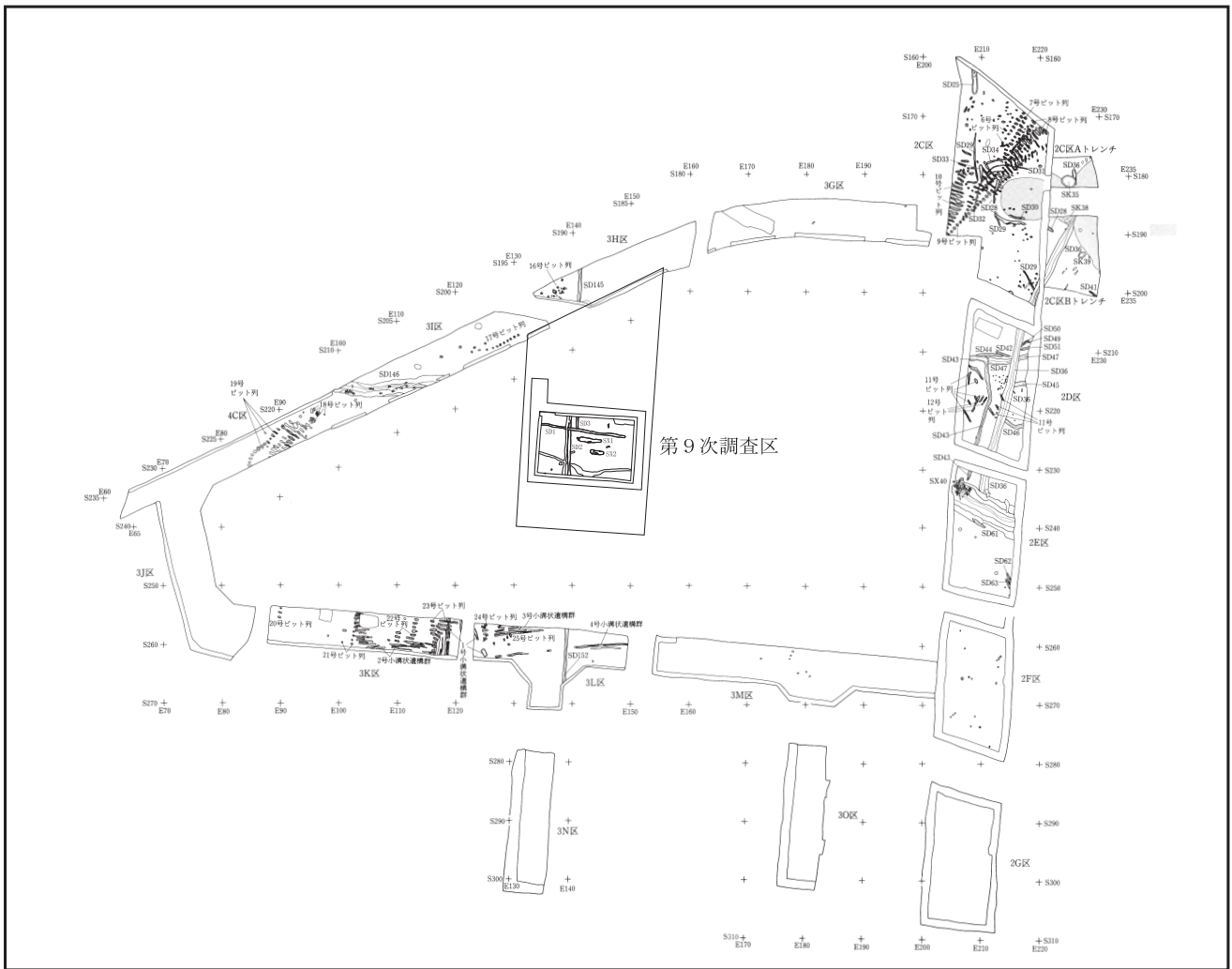
Ⅲ層は色調が明るいことや、一部の調査のⅣ層上面から畝状の高まりが検出されていることなどから、これまで自然堆積層との認識が強かった。しかしながら昨年度、区画整理事業関係調査の8A区において、Ⅲ層が分層され、その下半層上面から耕作痕跡とみられるピット列が多数検出されおり、Ⅲ層が地区によっては耕作土となっている可能性が指摘されている。Ⅲ層中に10世紀前半に降下した火山灰を含むことから、時期は平安時代を中心としたものと考えられ、今回の小溝群1群もまた同様の時期と考えられる。

周辺調査においても本調査のⅣ層相当面よりの小溝状遺構群の検出がある。北西に約200mの第4次調査では、同様の規模・形状の南北方向の小溝が群を成している状況が確認され、また東約200mの都市計画道路に伴う王ノ壇遺跡の調査では、筋状の断続的な溝群を検出している。後者においては上層が溝堆積土となり、溝底面には酸化鉄の集積層が確認されることから、これらの溝跡は水田耕作の痕跡と考えられている。

SD4は形状が耕作痕跡としての小溝とは異なり、堆積土下半には砂粒を含むことから、水利に関わる溝跡と考えられるが、1群との重複箇所も僅かなことから、1群やⅢ層との関係は不明瞭である。

Ⅴ層上面検出遺構

Ⅴ層上面での小溝状遺構群は遺跡のほぼ全域で検出されている。これらの殆どは東西及び南北方向を基準としながらも中には大きく傾くものも見受けられる。その一部はⅢ層下の殆ど埋まり切った古墳周溝上でも確認され、これらはまた現在では削平され失われた墳丘部には延びないことから、耕作時にはまだ墳丘は削平されることなく残されており、耕作は周溝上の窪地にまで及んでいたことがわかる。また周辺には古墳時代前期の堅穴住居跡が散在し、小溝群の中には住居と同時存在の可能性のある位置関係を示す例もあることから、小溝状遺構群の時期につい



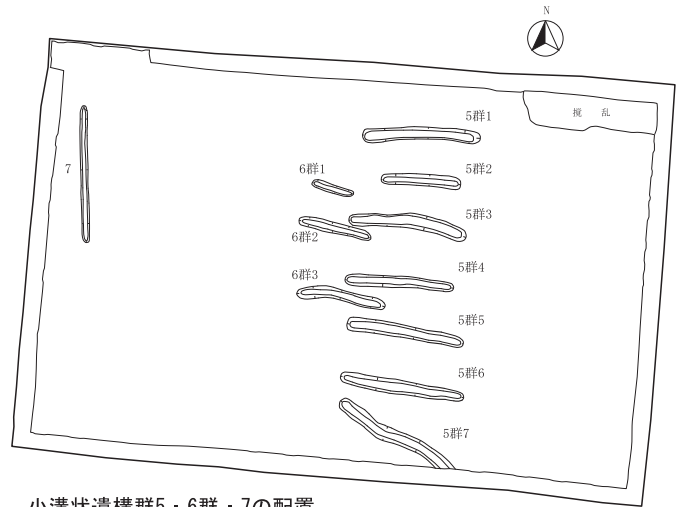
第13図 近隣の成果との対応関係 (仙台市文化財調査報告書第243集を転載し合成)

ては広い年代幅を想定しなくてはならないものと考えられる。

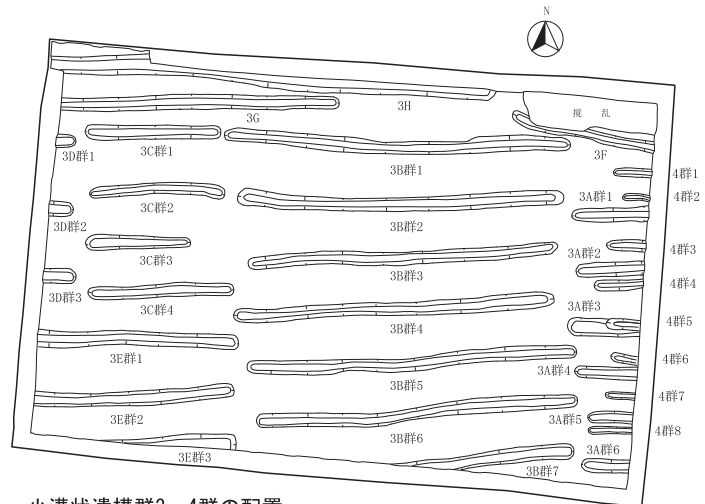
今回の調査で検出した小溝状遺構群は周辺の調査区同様、方位を強く意識した結果のものと考えられる。但し周辺での検出例とは方向が何れもが微妙に異なっており、残念ながら双方に同時期の耕作か否かは断言できない。方向性の違いについては周辺調査の各所間においても概ね方位に沿いながらも微妙な傾きが見られ、これらは前述の時期差に因ることに加え、旧河道や微高地などの周辺の微地形、さらには何らかの人為的要因に影響されるなど、様々な可能性が考えられる。

本調査での小溝状遺構群は南北方向の2群、東西方向の3・4群、さらに東西方向の5・6群に大きく分けることができる。この中で2群とその他の間には方向性や1区画の耕作単位などの耕作形態に大きな違いが見られる。2群については耕作単位が大きく、少なくとも調査区範囲内においては一時期に同様の作業を行っていたものと考えられる。これに対し2～6群は全てが同時性を持つものではなく、多少なりとも時期差が存在するものとみられ、その配置は2群とは大きく異なっている。これまでの調査では遺跡内各所において2群同様の等間隔に並んだ長い小溝が群を形成するもの多く見受けられたが、3群などの同時性のある小区画の集合体ともいえる例は殆ど無い。この配置が何に起因しているものか詳細は不明であるが、時期的・地形的な要素のみならず、これまであまり注目されなかった栽培作物を考える上でも参考となるものとみられる。

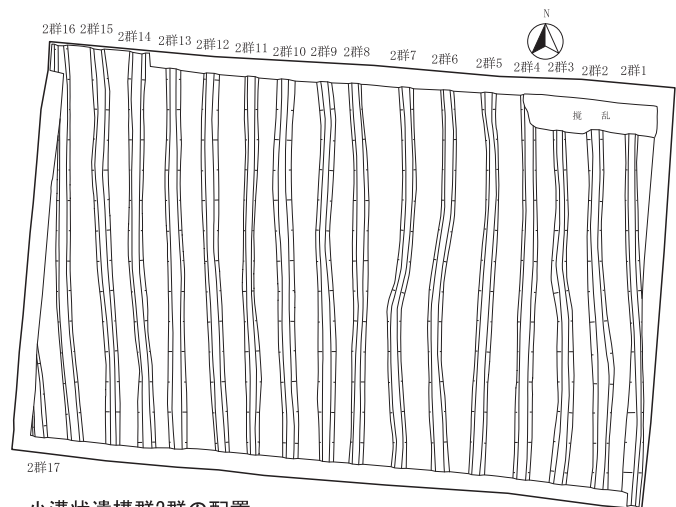
小溝状遺構群の時期を考える場合、その性格上遺物が殆ど無く、時期判別が難しいことから、重複遺構との関係で推定するしかない。しかし当地区には竪穴住居跡など時期判別の基準となる遺構が限られ、小溝群の時期判別は極めて難しい状況にある。前述の通り、竪穴住居跡との関係から、その上限は古墳時代前期とすることは可能である。その場合、畑耕作と古墳築造との関係が興味のもたれるところである。また下限については小溝群の母材層となるIV層中よりロクロ土師器が見られないことから、その殆どは奈良時代以前のものと考えられる。近年、本遺跡から北側に隣接する袋前遺跡にかけ



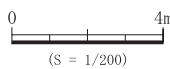
小溝状遺構群5・6群・7の配置
(3群より古いものを図示した)



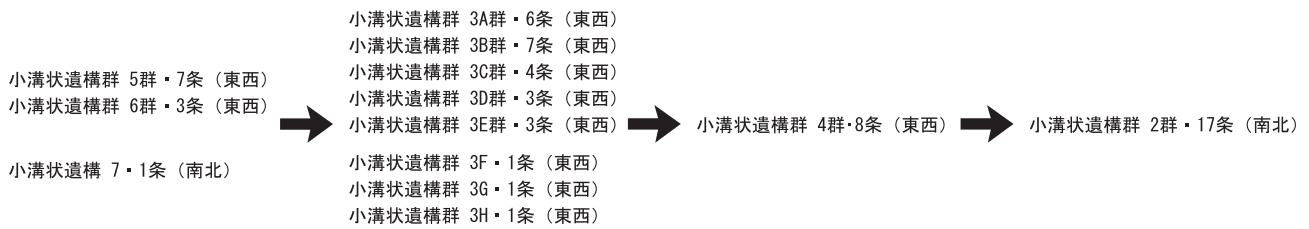
小溝状遺構群3・4群の配置



小溝状遺構群2群の配置



第14図 V層上面検出の小溝状遺構群の変遷



第15図 V層上面検出の小溝状遺構群 新旧関係

て発見された奈良時代と考えられる役所的な遺構群と小溝状遺構群との間に重複関係が確認された。ここでは8次調査においてV層上面遺構間で最も新しい小溝群が柱列跡に切られ、また反対に袋前遺跡や大野田古墳群9A区では大型の掘立柱建物跡が小溝群に切られるなど、古墳時代より畑作地であったこの地に広範な施設が造られながらも、その廃絶後は再び畑作地となったことを示すものである。

以上のことから、広い年代幅をもつ小溝状遺構群の時期については、その配置状況や出土遺物のみならず、今後はより多くの他遺構との重複や位置関係を基にした判別が不可欠と考えられる。

参考・引用文献

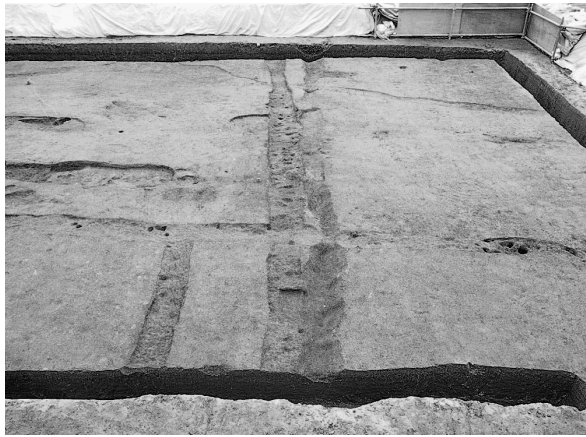
- 仙台市教育委員会 (1990) 『大野田古墳群 一発掘調査報告書一』 仙台市文化財調査報告書第138集
- 仙台市教育委員会 (1993) 『下ノ内浦遺跡 一第4次発掘調査報告書一』 仙台市文化財調査報告書第173集
- 仙台市教育委員会 (1995) 『下ノ内浦遺跡 一第5次発掘調査報告書一』 仙台市文化財調査報告書第202集
- 仙台市教育委員会 (2000) 『大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡一仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書I一』 仙台市文化財調査報告書第243集
- 仙台市教育委員会 (2000) 『王ノ壇遺跡 一都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡発掘調査報告書I一』 仙台市文化財調査報告書第173集



Ⅲ層上面遺構完掘状況（東より）



Ⅳ層上面遺構完掘状況（東より）



SD2・SD3完掘状況（北より）



SX1・SX2完掘状況（西より）



小溝状遺構群1群断面状況（西より）



SD4断面状況（東より）



SD4完掘状況（東より）



V層上面遺構完掘状況①（東より）



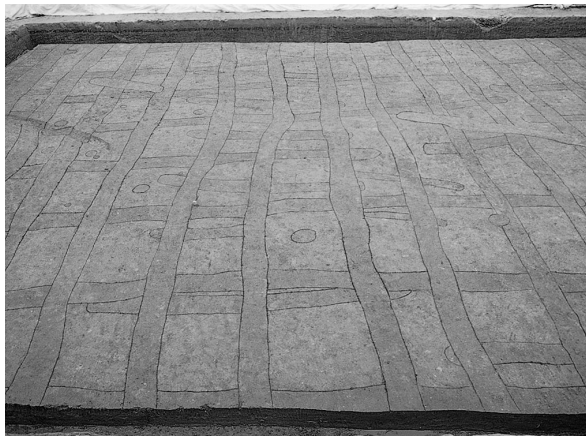
V層上面遺構完掘状況②（東より）



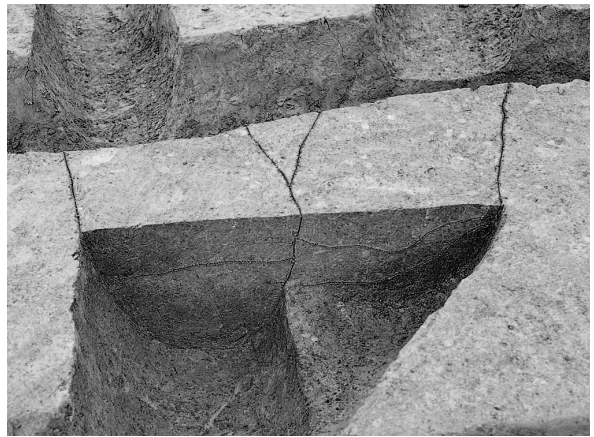
V層上面遺構検出状況（南より）



V層上面遺構完掘状況（南東より）



V層上面遺構検出状況（北より）



小溝状遺構群3B群6・5群7断面状況（西より）



調査区北壁断面状況



調査区北壁断面状況



調査区東壁断面状況



調査区東壁断面状況



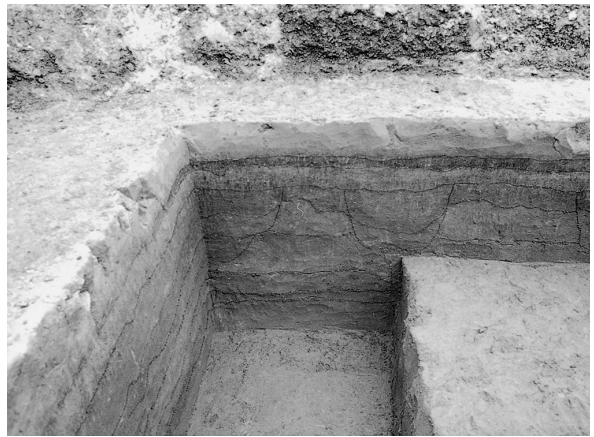
調査区南壁断面状況



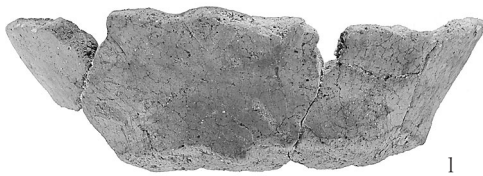
調査区西壁断面状況



下層調査区状況

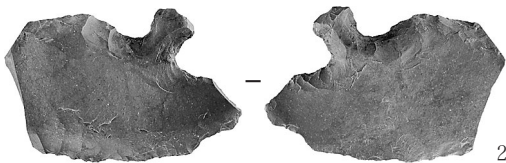


調査区南壁断面状況



C1
(第12図1)

1



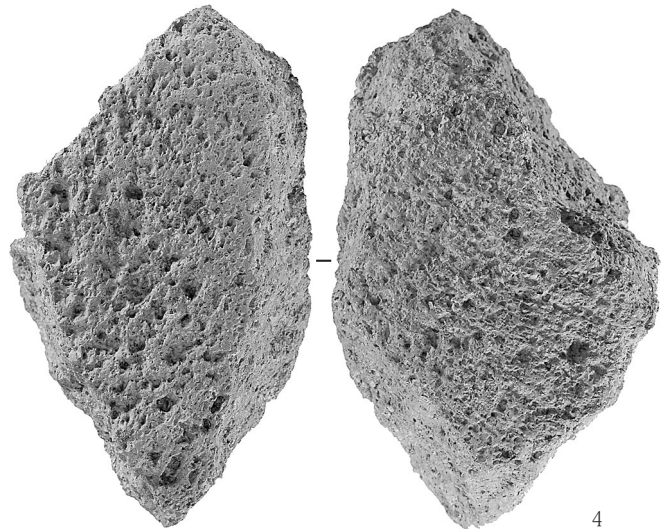
Ka1
(第12図2)

2



Kd1
(第12図3)

3



Kd2
(第12図4)

4

出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおのだこふんぐん							
書名	大野田古墳群							
副書名	第9次発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第291集							
編著者名	佐藤 淳 黒田恵之 東野豊秋							
編集機関	仙台市教育委員会							
住 所 地	〒980-8671 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7番1号 TEL 022-214-8894							
発行年月日	2005年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおのだこふんぐん 大野田古墳群 だいじちゅうき 第9次調査	みやぎけん せんだいし たいはくく 宮城県仙台市太白区 おおのだ あざみや 大野田字宮40-1	04100	01361	38°12'37"	140°52'40"	2004.09.27 } 2004.11.11	200m ²	マンション 建設に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大野田古墳群 第9次調査	畑跡	古墳～中世	小溝状遺構群 溝跡	土師器・須恵器 石製品・石器				

仙台市文化財調査報告書第291集

大野田古墳群

第9次発掘調査報告書

2005年2月

発行

仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7番1号
文化財課 TEL 022(214)8894

印刷

文明堂印刷株式会社
東京都北区中十条二丁目14-12